

叉状研齒

春 成 秀 爾

-
- | | |
|-----------|-----------|
| 1 研究史 | 3 叉状研齒の特徴 |
| 2 叉状研齒例集成 | 4 叉状研齒の意義 |
-

1 研究史

「叉状研齒」とは、ヒトの上顎の中切歯の唇面溝から切痕にかけて2～3条、同じく側切歯の同じ部位に1条の截痕を縦につけて歯牙をフォーク状に加工・変形した習俗のことである。その名称は、鈴木尚氏によって1939年に与えられたが〔鈴木 1939 : 6～8〕, おそらく小林行雄氏の『日本考古学概説』に採用されたことがきっかけとなり〔小林 1951 : 46～47・74〕, 1950年代からごく一般的に使われるようになった。

截痕の発見 縄文時代人骨にみられる叉状研齒を、最初に報告したのは小金井良精氏である。氏は1919年に、「上門歯4本に截痕を施した」初見として大阪府国府遺跡出土K G 9号人骨を報告し、「故らに本来の形（切歯の切痕から唇面にかけて縦走る浅い溝のこと……H）に擬えて、これを強めた様にも見える」と述べ〔小金井 1919 : 356～357〕, それは「装飾の意義」をもち、「勇猛を装うため」とも、「一種の俳優様のもの」とも、「妖術者の類」とも、「その外尚色々な説も起り得るであろうが、皆推量に過ぎない」とした〔同前 : 365〕。小金井氏は、この例をドイツ語で世界の学界にも紹介したが、そのときは *Eckzähne* つまり尖歯の名称を用いている〔KOGANEI 1922 : 453〕。

次いで、清野謙次氏が同例を愛知県稲荷山遺跡出土の男性人骨2例に見出し、「今日迄に発見せられた日本石器時代人骨は七百に余るだろうが、斯かる例が唯数例であること、及び河内と三河と離れて居るに拘らず加工と抜歯の全然同一なことは、特殊階級或は特殊職業と本例と関係があるまいかと思わせる」と述べた〔清野 1923 : 43〕。ここに初めて、叉状研齒人物の性格について一つの説明が与えられたのである。

又状研歯

清野氏はさらに、愛知県吉胡遺跡でも同例を検出し、「縦走截痕」と命名した。ところが、それらは男性2例、女性3例であったために、同氏は、「之が男性或は女性のいずれかに偏して存在するのならば特殊職業を考えるに都合良いが、男女共に縦走截痕が存在し、且副葬品にも何等據る所がないから考察を下す手掛かりが無い」と匙を投げてしまった〔清野 1928 : 109～111〕。

又状研歯＝有力者説の提唱 鈴木尚氏は1939年、「人工的歯牙の変形」についての概説を書いたさいに、「又状研歯」の用語を初めて用いた。これは、アフリカですでにその存在が知られていた *Zackenfeilung* [SCHRÖDER 1906 : 35～37]（英語でいえば *teeth filing* つまり「歯のやすりかけ」の意）を和訳し、それに形容詞をつけたものであった。そして、愛知県伊川津遺跡の3体合葬例にもふれ、「種族又は部落の有力者では無いか」との考えを示した〔鈴木 1939 : 7～8・30～31・49〕。

眞岡亀四郎氏は1940年、清野氏蒐集の又状研歯7例を写真を添えて報告し、「或る特殊な家系又は職業を表わすとも考えねばならぬ」とした〔眞岡 1940 : 166～168〕。

同年、鈴木尚氏は愛知県伊川津遺跡の3体合葬例を詳細に報告した。氏は、又状研歯例を抜歯種との組み合わせから7型式に分類した。そして、「副葬品」が多いこと、合葬された3例がすべて又状研歯であったことから、「特殊階級乃至種族の有力者で、三者は同階級乃至同族であろう」と考え、そのうちの1体が着装していた猿の橈骨製耳飾も「これと何等かの関係を持って居るものかも知れない」とした〔鈴木 1940 : 16〕。すなわち、「種族の有力者」説が根拠を示して提出されたのである。

鈴木氏はさらに敗戦後すぐの1946年、又状研歯について短文を書いた。又状研歯例は抜歯人骨中の「恐らく2～3%の程度と考え」、又状研歯と「副葬品」を多くもつ伊川津S Z44・45・46号の3体合葬例から、清野説を「増々有力にさせるもの」とした〔鈴木 1946 : 30〕。

その一方、戦時下で執筆された清野謙次氏の日本人種論の集大成は1949年になって刊行されたが、「縦走截痕」を「複尖研歯」と呼びかえた程度で、新しい意見の提示はみられない。ただ新しく、岡山県津雲遺跡1号人骨の上顎左右の中切歯は、それぞれ遠心側の下方から人工的に研磨した結果、正中線において逆三角形に尖ったとみなして、これを「単尖研歯」と名づけた〔清野 1949 : 229～231〕。

その後、小林行雄氏は又状研歯人物について、「あるばあいは男性的な戦士の長であり、あるばあいは神々との対話をつかさどる女性呪術師であった」と「想像」し〔小林 1967a : 45～46〕、伊川津遺跡の3体合葬例は、「集団の指導者、あるいはその補助者」で、「この3人は率先して戦いの指揮をとり、不幸にして戦死したと解釈」

した〔小林 1967b : 148～151〕。

抜歯型式からの追究 それに対して筆者は、1973・79・80年に叉状研歯25例を集成し、叉状研歯は東海地方西部から近畿地方の縄文晩期にみられる習俗であること、叉状研歯は上顎中・側切歯が遺存しないかぎり確認できないので、実際の施行率は鈴木尚氏の推計より高く5～10%位かもしれないこと、性は男性12例、女性12例、不明1例で男女比が一致すること、施術の時期は若～壮年期であるらしいこと、当時の抜歯型式は上顎の犬歯2本を抜去したあと下顎の4本の切歯を抜く4I系と下顎の犬歯2本を抜く2C系があり、その割合はほぼ1対1であるにもかかわらず、叉状研歯例の抜歯は4I系が19例、2C系が3例で一方向的に4I系に偏っていることを明らかにした。そのうえにたって、抜歯の4I系はその土地の出身者、2C系は他集団からの婚入者と推定し、叉状研歯はその土地出身者の一部に施されるものと考えた〔春成 1973 : 33～35〕・〔春成 1979 : 47～48〕・〔春成 1980 : 56～58〕。その後、伊川津SZ44号人骨を実見する機会を得たので、それが20歳前後で死亡した人物であること、合葬された3人は兄弟であった可能性があること、もっとも若いSZ44号の叉状研歯が完了しているのに対して、25～29歳のSZ45号、30歳のSZ46号は完了していないことから、この社会には末子相続の制度が存在したのではないかと、この臆測まで述べた〔春成 1984 : 12～13〕。

以上を承けて小稿では、現在知られている叉状研歯28例の記載を行ない（人骨番号の後の*は、筆者が実物を観察しえたことを示す⁽²⁾）、それに基づいて、より具体的に分析し、「呪術師」あるいは「指導者」という第一印象以上に進展をみない叉状研歯人物の性格論について、一石を投じてみたいと思う。

2 叉状研歯例集成

a 愛知県渥美郡渥美町福江・保美遺跡

渥美半島の先端に近い台地上に所在する縄文時代晩期初頭から弥生前期条痕土器までの貝塚を伴う遺跡で、大正時代以来出土した人骨の総数は50体をはるかに超えている。そのうち抜歯が認められた人骨は48体以上であるが、詳細は未報告の例がひじょうに多い。管見のかぎりでは、下顎の切歯4本（4I型）あるいはそれに加えて犬歯2本（4I2C型）を抜いた4I系は男性3、女性8、下顎の犬歯2本（2C型）ある

叉状研歯

いはそれに加えて中切歯 2 本 (2C2I 型) を抜いた 2C 系は男性 8, 女性 2 である。

叉状研歯は 2 例報告されている。

1 保美MY 3 号人骨*(図 1) 1925年に宮坂光次氏によって発掘・報告された例である [宮坂 1925: 368~369]。宮坂氏は壮年の男性と鑑定し、その後、小林和正氏が25~29歳?と推定している。上顎左右中切歯にそれぞれ2条の截痕をもっているが、右側切歯は紛失しているために不明、左側切歯から奥も欠損しており不明である。截痕は、右中切歯は歯冠唇面から舌面まで及んでいるが、左中切歯は切縁の象牙質で終わっている。しかし、どちらも咬耗が進む前は深い切り込みをもっていたと思われる。上顎中切歯は水平にかなり咬耗している。抜歯は上顎右犬歯に行なっているが、左は不明。下顎はまったく抜歯していない0型である。この遺体は猿の桄骨製の耳飾を伴っていた。東京大学総合研究資料館蔵。

2 保美S Z 1963—7 号人骨(図 1) 1963年に鈴木尚氏ら東京大学人類学教室によって発掘され、頭部に磨製石斧による損傷をもつ人骨として報告されたものである [鈴木 1975: 270~272]。「当時としては稀なほどの老年」の男性で、残存していた上左中切歯に2条の截痕が認められた。截痕は唇面から舌面まで達する状態でよくのこっているから、本来十分に切り込みを入れていたのであろう。咬耗は切縁の遠心側に向かって急斜になるほど進んでいる。抜歯は、上顎は右犬歯と第1小臼歯にその痕跡があるが、左側は歯槽縁が破損しているために不明である。下顎は全切歯を抜いた4I型である。上顎中切歯の切縁が斜めに磨滅しているのは、下顎の犬歯との咀嚼をくり返し行なったからであろう。鈴木尚氏保管。

b 愛知県渥美郡渥美町・伊川津遺跡

渥美半島の中ほど、三河湾に面する礫堆上に立地する縄文時代後期末から晩期後半の貝塚を伴う遺跡である。大正時代以来発掘された人骨は約183体に達するが、何らかの形で報告のあるものはそのうちの約68体にとどまる。抜歯は知り得た限りでは、4I系は男性8, 女性7, 2C系は男性11, 女性14である。

叉状研歯は9例報告されている。

伊川津KG 9・21・22・番外6号人骨は、1922年に小金井良精氏によって発掘されたものである。

3 伊川津KG 9号人骨*(図1) 小金井氏の鑑定では、成人の女性である [小金井 1923: 231~232]。上顎は断片的であって、右中切歯の唇面エナメル質部分にのみ2条の截痕を確認できるが、「極めて軽度のものであって、余程注意しなければ見脱

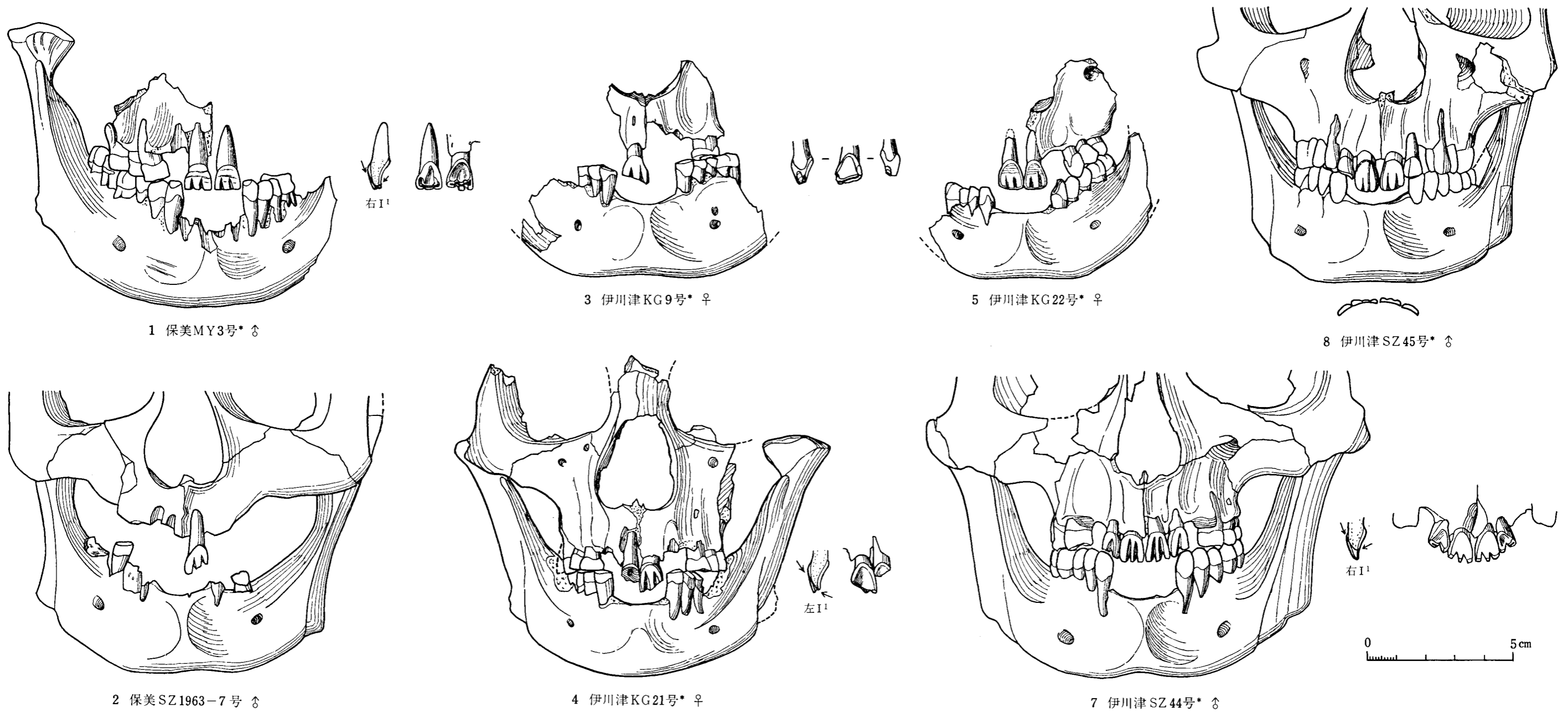
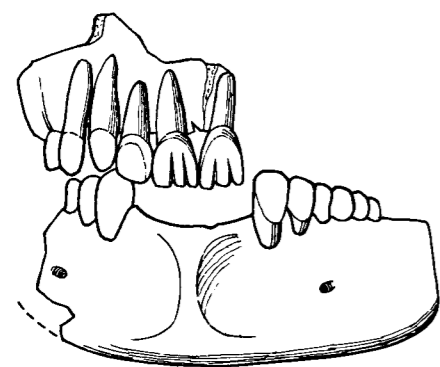
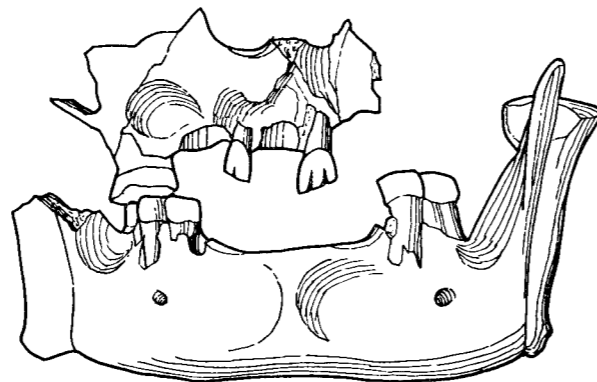


図1 保美・伊川津遺跡出土人骨の叉状研歯（人骨名称の後の*は実測，無印は写真から作図）

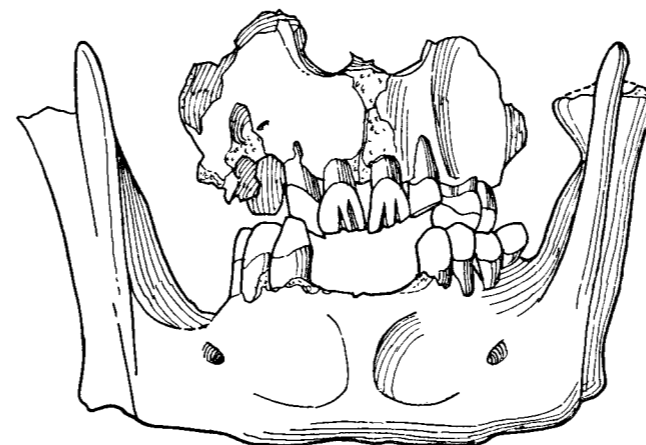
Fig.1



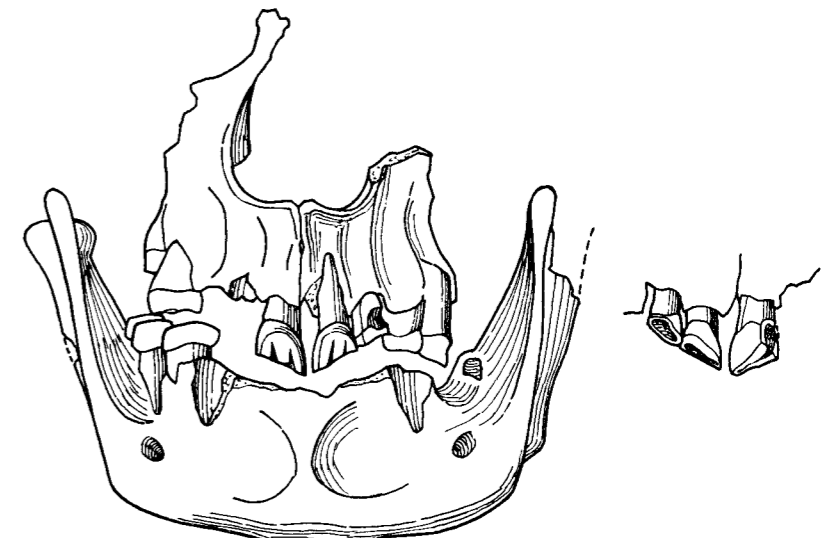
9 伊川津 SZ46号 ♂



12 吉胡 KY21号 ♀



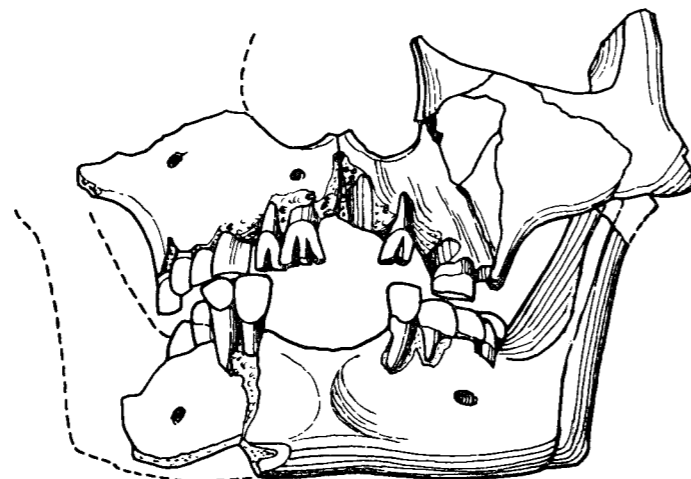
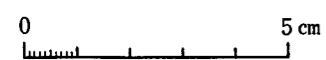
14 吉胡 KY85号 ♂



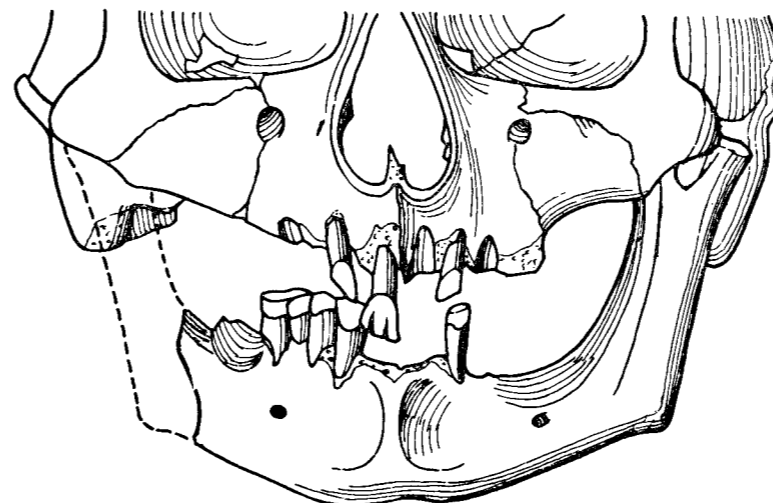
16 吉胡 KY280号* ♂



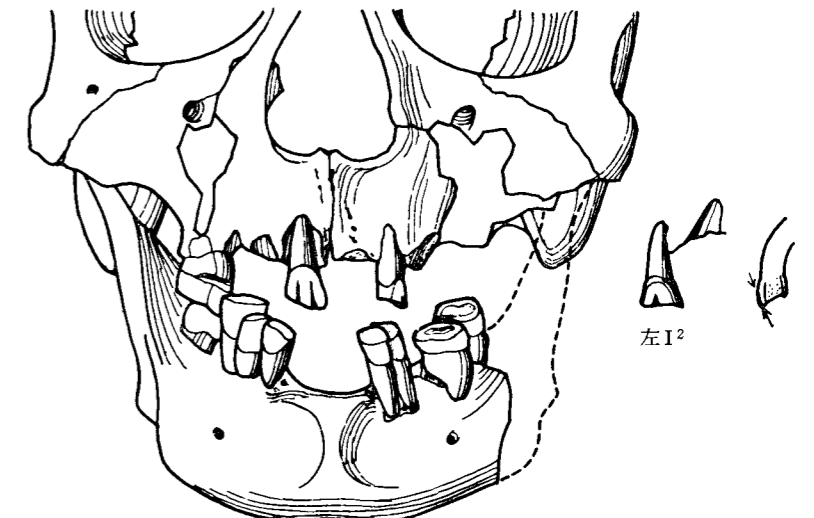
11 伊川津 IK19号* ♂



13 吉胡 KY35号 ♀



15 吉胡 KY120号 ♂



17 吉胡 BN13号* ♀

図2 伊川津・吉胡遺跡出土人骨の叉状研歯

Fig.2

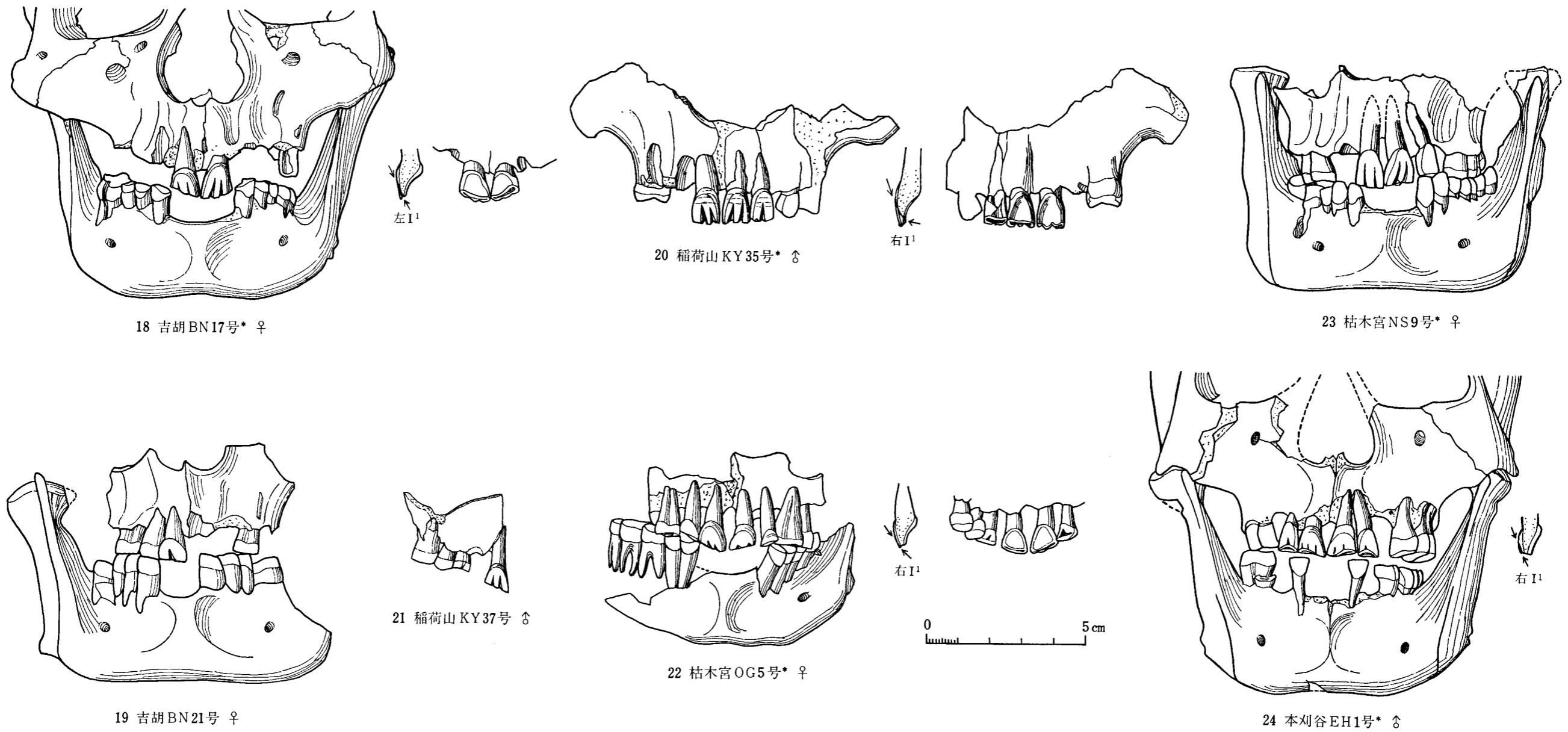


図3 吉胡・稲荷山・枯木宮・本刈谷遺跡出土人骨の叉状研歯

Fig.3

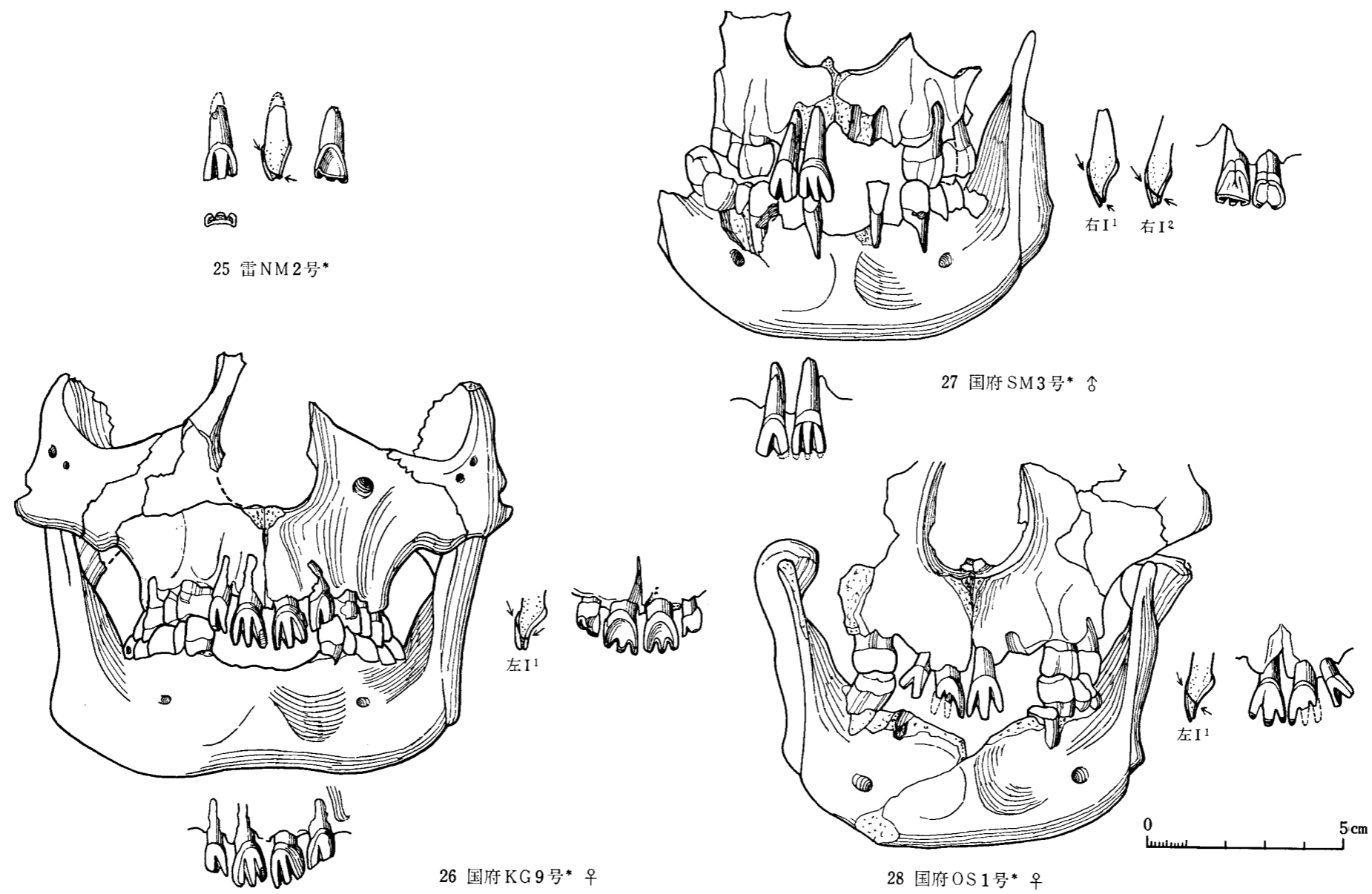


図4 雷・国府遺跡出土人骨の叉状研歯

Fig.4

す程度のものである」。切縁は、下顎右犬歯との咬合により右上がりに磨滅している。研歯は未了とってよいだろう。抜歯は、上顎では左犬歯（右は不明）、下顎では全切歯に行なった4 I型である。東京大学総合研究資料館蔵。

4 伊川津KG21号人骨*(図1) 次の22号人骨および20号幼児(約8歳)人骨と3体合葬していたものである[小金井 1923: 323]。小金井氏によれば、熟年の女性であるが、その後、小林和正氏は25~30歳と鑑定している。截痕は、残存する上顎左中切歯に2条認められる。うち近心側の1条は唇面から舌面まで達しているが、咬耗の状態から判断すると、切縁の切り込みは浅かったようである。右中切歯は、歯冠が全部齶蝕して不明であるが、左側と同様であったと考えてよい。左右の側切歯は紛失してしまったために不明である。抜歯は、上顎の左右犬歯と下顎の全切歯を抜いた4 I型である。東京大学総合研究資料館蔵。

5 伊川津KG22号人骨*(図1) 小金井氏によれば歯の「咬耗零」の「殆ど成人」の女性である[小金井 1923: 323]。その後、小林和正氏は年齢幅を15~16歳に限定している。上顎の左右中切歯「前面に縦に2条の磨った痕がある」。その痕跡は、2条の唇面溝に線条痕が重なっている程度で、伊川津KG9号や同SZ45号よりもわかりにくい。現在知られている叉状研歯のなかではもっとも軽微な例であって、研歯は確実に未了とみてよい。上顎右側は完全に欠失している。抜歯は、上顎左側では側切歯に行っており、犬歯は植立している。下顎は全切歯を抜いた4 I型である。抜歯後の歯槽は完全に閉鎖しすでに稜状の縁に変化している。抜歯は研歯よりさかのぼった時期に行なった可能性があるだろう。東京大学総合研究資料館蔵。

6 伊川津KG番外6号人骨 1923年に小金井良精氏によって報告された[小金井 1923: 236~237]。熟年女性例で、頭骨は右下顎と上左中切歯があるだけである。中切歯は「前面に縦に二条の深い溝が磨り込んである。咀嚼縁は三叉になっていたろうが、外側の二尖端は強く磨耗して、只内側の一尖端が残っている」。下顎は、中・側切歯と犬歯を抜去した4 I 2C型である。本人骨は東京大学総合研究資料館に移管される時点ですでに行方不明となっていた、という。

伊川津SZ44・45・46号は、1936年に鈴木尚氏によって発掘されたもので、合葬された3体すべてに叉状研歯が認められた珍しい例である[鈴木 1940: 11~16]。3体は、「貝層とその下にある砂礫層との境から発見された」というから、晩期初頭~前葉に属する可能性がよい。44号と46号は伸葬で、ほぼ北方向に密接して並び、45号は軽度の屈葬で、ほぼ西方向に頭部を向け、44・46号の上に下肢の一部をおく。しかし、下の遺体は「何等攪乱された跡を見ない」ので3体合葬と判断された。

7 伊川津 S Z 44号人骨*(図1) 30歳前後の男性とされたが、上顎左右の第3大臼歯は、隣接する第2大臼歯とくらべると萌出が不十分で咀嚼に参加していない。また、歯根もまだ十分に形成されていないから、20歳前後と訂正すべきであろう。又状研歯は、中・側切歯とも唇面から舌面に達し、切縁の切り込みの深い完全なフォーク状を呈する。截痕は、中切歯は2条、側切歯は1条である。これらの切歯は、下顎の犬歯と咬合する側切歯の遠心側をのぞくと咬耗が進んでいないために4本の切歯の切縁は外湾する弧線を描き、又状研歯は見事に保存されている。抜歯は、上顎左右の犬歯・第1小臼歯、下顎の全切歯に行なった4I型である。下顎の抜歯後の歯槽は完全に閉鎖し稜状になっており、早い時期の抜歯を物語っている。なお、近年、各種の印刷物に使われている本人骨の写真の下顎骨は別個体(S Z 17号人骨)のものである。S Z 44号人骨は、装身具として猿の橈骨製耳飾を左右に各1個、猪の牙を2個合わせてつくった足輪を左右の足関節に各1個、首飾として「孔を穿った小形の青石数個」を着けていた。東京大学総合研究資料館保管。

8 伊川津 S Z 45号人骨*(図1) 男性で、30歳前後とされてきたが、小泉清隆氏の鑑定によると、25～29歳である。又状研歯は、左右の中切歯にのみ施し、しかも唇面のエナメル質にごく浅い2条の截痕をのこしているだけである。それも右中切歯の近心側の1条は歯冠一杯にわたる細く鋭い溝となっており比較的明瞭であるが、遠心側のそれは前者より浅い。そして、左中切歯の截痕は、浅く幅広い溝となっているので、研歯の効果は皆無といってよいほどわかりにくい。以上の4条の截痕のうち右中切歯近心側の1条だけが比較的鮮明であるのは、早く中切歯2本に浅い截痕を入れたが途中でやめていたのを、後になってまたその1条だけを彫り直した、と説明したほうがよいかもしれない。しかし、いずれにせよ研歯は未了のまま終っている。側切歯は下顎の犬歯と咬合しているため咬耗が進んでいるが、中切歯は下顎の側切歯と咀嚼する遠心側の隅だけが咬耗が進んでいる。抜歯は、上顎の左犬歯と下顎の全切歯に行なった4I型である。装身具は、猪牙を2個合わせて作った腕輪を右腕関節付近に着けていた。国立科学博物館保管。

9 伊川津 S Z 46号人骨(図2) 男性で、小泉氏によると30歳である。又状研歯は左右の中切歯に各2条の浅い截痕がのこされているだけで、右側切歯には認められない。中切歯の截痕は、歯冠の中ほどから切縁までで舌面までは及んでいない。切縁の切り込みは浅く、やはり未了の可能性もある。全切歯の切縁は下方に外湾する弧状になっている。抜歯は、上顎の右犬歯などにせず(左は側切歯から奥は欠損により不明)、下顎は全切歯に行なった4I型である。

10 伊川津 S Z 213号人骨* 1958年に鈴木尚氏らによって発掘されたもので、成人の女性である。上顎は、左中切歯に2条、右側切歯に1条の明瞭な截痕が認められる。のこり2本の切歯は脱落して不明。抜歯は上顎の左右犬歯、下顎の全切歯を抜いた4 I型である。

11 伊川津 I K 19号人骨*(図2) 地元民が発見・再埋葬した人骨を、1984年に伊川津遺跡発掘調査団が再発掘したものである[江原ほか 1988: 366]。熟年男性で、頭骨の保存状況はよくなく、遊離出土した左中・側切歯に叉状研歯が認められた。截痕は、中切歯に3条、側切歯に1条のこしている。中切歯の唇面は歯冠の中央付近まで溝をつくり、切縁の切り込みは象牙質まで達し、さらに舌面まで及んでいる。側切歯は歯冠唇面のエナメル質にのみ溝をのこしている程度で、切縁は磨滅により切り込みはみられない。この磨滅は唇面方向に向かっており、中切歯とは逆になっている。抜歯は、上顎左は犬歯、右は不明、下顎は全切歯を抜去した4 I型である。京都大学霊長類研究所保管。

c 愛知県渥美郡田原町・吉胡遺跡

渥美半島の中ほど渥美湾に面する段丘上から段丘下の礫堆上に立地する縄文晩期を中心に後期後半から弥生前期に及ぶ貝塚遺跡である。1922～23年に清野謙次・宮本博人両氏によって307体の人骨が発掘され、そのなかに叉状研歯が4例見出された〔清野・金高 1929〕・〔眞岡 1940〕・〔清野 1949〕・〔清野 1969〕⁽³⁾。さらに、1951年に文化財保護委員会によって33体の人骨が発掘され、3例の叉状研歯が検出された〔中山 1952〕。また、清野氏ほかによって報告されなかったもの(K Y 280号)が1例ある。抜歯は、4 I系が男性37、女性28、2 C系が男性29、女性20である。

12 吉胡 K Y 21号人骨(図2) 熟年の女性である[眞岡 1940: 166～167]。保存されている上顎の左中切歯に2条の深い截痕があるが、右側切歯は磨耗が進んで截痕は判然としない。中切歯・側切歯とも切縁は斜めにそいのように磨滅しているので、眞岡氏は「人工によるもの」としたが、下顎の第1小臼歯との咬合による磨滅とみて不自然ではない。抜歯は、上顎では左右犬歯・第1小臼歯、左側切歯(?)、下顎では全切歯・犬歯に行なった4 I 2 C型である。上顎は行方不明、下顎ほかは京都大学自然人類学研究室蔵。

13 吉胡 K Y 35号人骨(図2) 熟年の女性である[眞岡 1940: 16]。上顎の右中切歯に2条、左右側切歯にそれぞれ1条の截痕がのこされている。左中切歯は失われて不明。截痕は深い、中・側切歯ともほぼ水平に磨耗しているので、眞岡氏は「研磨」

叉状研歯

と判断したが、これも自然の磨減とみてよい。抜歯は、上顎の左右犬歯と下顎の全切歯を抜いた4 I型である。上・下顎とも行方不明、他は京都大学自然人類学研究室蔵。

14 吉胡KY85号人骨(図2) 熟年の男性である[真岡 1940: 167]。上顎の左右中切歯にのみ各2条の截痕がのこされている。左右側切歯は、磨減して短くなったためか、截痕はみられない。中切歯の截痕は深い、現在では舌面までは達せず、また切縁の切り込みも浅かったようである。真岡氏は、「咀嚼面研磨し下方に向けて外上方より斜となしてある」とするが、自然の咬耗と思われる。抜歯は、上顎の左右犬歯、下顎の全切歯に行なった4 I型である。V字形の鹿角製腰飾を伴っていた[春成 1985: 25]。上・下顎とも行方不明、他は京都大学自然人類学研究室蔵。

15 吉胡KY 120号人骨(図2) 壮年の男性である[真岡 1940: 167]。叉状研歯は、上顎右中切歯に2条の截痕が認められる。截痕は唇面のエナメル質にのみ浅くのこっている。左中切歯は脱落して不明。側切歯は左右とも遠心側に向かって短く斜めに磨減しており、截痕はのこっていない。抜歯は上顎は左犬歯と右第1小臼歯、下顎は全切歯を抜いた4 I型である。V字形の鹿角製腰飾を着けていた[春成 1985: 25]。右上顎は行方不明、他は京都大学自然人類学研究室蔵。

16 吉胡KY280号人骨*(図2) 熟年の男性で、叉状研歯は上顎左右の中切歯にみられる。左側切歯は咬耗が進んでいるために不明、右側切歯は発掘時に脱落している。截痕は、それぞれ2条で、右中切歯の近心側は切縁の象牙質まで及んでいるが、他は唇面のエナメル質にのみこっている。切り込みは本来はある程度は深かったであろう。抜歯は、上顎は左右の中切歯と犬歯、下顎は全切歯・犬歯を抜去した4 I 2 C型である。京都大学自然人類学研究室蔵。

吉胡BN13号・17号・21号人骨は、1951年の文化財保護委員会による発掘調査時に、いずれも第2トレンチから出土したもので、中山英司氏によって報告された[中山 1952: 143~144]。埋葬状態で特に注目されるのは、同じトレンチ内から発掘された他の3体が仰臥屈葬であったのに対して、これらの近接して発掘された3体と腰飾を身に着けたBN25号1体だけは「座位屈葬」であったことである。

17 吉胡BN13号人骨*(図2) 貝層下の細礫層に掘りこんだ墓坑中に埋葬しており、縄文晩期中葉とみなされている。熟年の女性で、叉状研歯は上顎右中切歯と左側切歯に認められる。中切歯の歯冠の遠心側の咬耗は進んでおり、切縁は斜めになっている。2条の截痕は唇面にのみ浅くみられ、舌面までは及んでいないようである。側切歯は咬耗がかなり進んでおり、截痕は唇面のエナメル質にのみきわめて浅くのこって

いるにすぎない。抜歯は、上顎の左右犬歯と下顎の全切歯・犬歯を抜いた4I2C型である。左右の腕にはそれぞれ1個の貝輪を装着していた。右中切歯は行方不明、のこりは京都大学霊長類研究所保管。

18 吉胡BN17号人骨*(図3) 貝層下の細礫層に埋葬しており、縄文晩期中葉とされている。壮年の女性で、叉状研歯は、残存する左右中切歯にのみそれぞれ2条の截痕が認められる。左右とも歯冠の遠心側が著しく磨滅しており、左右合わせると切縁はV字状を呈する。截痕は現状では、近心側は左右とも象牙質まで及び、遠心側は右はエナメル質で、左はエナメル質と象牙質の境で終わっている。切縁の切り込みは本来は深かったと思われるが、歯冠の磨滅により、現在は失われている。抜歯は、上顎の左右側切歯・犬歯と下顎の全切歯にした4I型である。田原町郷土資料館保管。

19 吉胡BN21号人骨(図3) 貝層下の細礫層に人骨はあり、晩期中葉とされる。熟年の女性である。中山氏の記述によると、叉状研歯は、中切歯に2条、側切歯に1条の截痕を入れたものである。しかし、写真で見るかぎり、右中切歯の截痕は咬耗の進んだ歯冠の中央部に、本来は深かったと思われる1条の截痕だけが認められる。左中・側切歯は脱落しており不明である。抜歯は、上顎は不明、下顎は全切歯と犬歯を抜いた4I2C型である。上顎は行方不明、他は京都大学霊長類研究所保管。

d 愛知県宝飯郡小坂井町平井・稲荷山遺跡

豊川に面する低台地の末端に立地する縄文晩期中葉から弥生前期にかけての貝塚遺跡で、1922年以来、75体以上の人骨が出土している。

叉状研歯は、1922年に清野謙次氏によって発掘された59体の人骨中に2例含まれていた[大倉 1939:109・113]・[眞岡 1940]・[清野 1969:142]。抜歯は、4I系が男性14、女性10、2C系が男性10、女性1である。

20 稲荷山KY35号人骨*(図3) 熟年の男性である[眞岡 1940:166]。叉状研歯は、上顎の左右中切歯に2条、左側切歯に1条の截痕がのこされている。截痕は右中切歯は舌面まで及んでいるが、他の2本は咬耗により切縁で終わっている。抜歯は、上顎は左右犬歯を抜いている。下顎は遺存していないために正確にはわからないが、上顎側切歯の磨耗が比較的進んでいるのに対して、中切歯はそれほどでないから、おそらく、全切歯を抜いた4I型であったのであろう。上顎は慶応義塾大学考古学研究室蔵(ただし、左犬歯部から遠心側は行方不明)、他は京都大学自然人類学研究室蔵。

21 稲荷山KY37号人骨(図3) 熟年の男性である[眞岡 1940:166]。上顎の右側の一部しか遺存していないが、右中切歯に2条の截痕がのこされている。右側切歯

又状研歯

は脱落して不明である。截痕は、それほど深くはなく、また切縁が磨滅しているために切縁の切り込みはみられない。しかし、研歯は完了しているとみなしてよいだろう。抜歯は、上顎は右犬歯にみられる。下顎は全切歯が抜かれた4I型である。上顎は行方不明、下顎はかは京都大学自然人類学研究室蔵。なお、この人骨は、KY38号人骨と合葬されていた。これは熟年の女性で、抜歯は上顎の左右犬歯・右側切歯、下顎の全切歯を抜いた4I型である。

e 愛知県西尾市寺津町～巨海町・枯木宮遺跡

三河湾に面する碧海台地の南端に位置する縄文晩期初頭の貝塚遺跡である。1968年以降の発掘調査で、10体以上の人骨が発掘され、そのなかには又状研歯例が2体含まれている。

22 枯木宮OG5号人骨*(図3) 1972年に工事中に発見され、小片保氏らによって調査されたもので、壮～熟年(35～40歳)の女性である[小片ほか 1981: 68～75]。全切歯が著しく磨滅しているために、又状研歯は上顎左右中切歯にのみわずかに確認できる。4本の切歯の切縁線はV字形を呈する。右中切歯の截痕は長さが2mmほどの2条で、近心側の1条は遠心側の1条より浅い。左中切歯では右ほどはっきりしないが、唇面末端のエナメル質にやはり2条の截痕が長さ約1mmほどかすかに認められる。截痕の本来の長さは歯冠長の1/2たらずであったと推定されるので、研歯は未完了のまま終わっている可能性が大きい。抜歯は、上顎の左右犬歯と下顎の全切歯に行なった4I型である。なお、又状研歯を施した4本の切歯の磨耗面には、「きわめて微細な条痕が無数に」「唇・舌側の方向に走っている」ことから、小片氏らは、「人為的に研磨されたもの」と推定している。しかし、歯を一種の道具として用いたために生じた磨耗面の可能性もある。京都大学霊長類研究所保管。

23 枯木宮NS9号人骨*(図3) 1980年に西尾市教育委員会によって発掘されたもので、若年の女性である。上顎左右の第3大臼歯は萌出は終わっているが未咬耗、下顎右の第3臼歯は萌出しているが咀嚼面まで達していない。同左は萌出はほとんど終わっているが、まったく咬耗していない。また、長管骨の骨端線が骨化していない。したがって、年齢は17～18歳ごろと推定される。又状研歯は上顎左右中切歯にのみそれぞれ2条認められ、左側切歯にはない。右側切歯は脱落して不明である。截痕は歯冠唇面のほぼ中央から始まり、切縁の前半分までエナメル質部分にのみ浅く施している。したがって、研歯は目立たず、未完了と思われる。抜歯は上顎の左右犬歯・第1小臼歯と下顎の全切歯で、4I型に属する。京都大学霊長類研究所保管。

f 愛知県刈谷市天王町・本刈谷遺跡

本刈谷遺跡は西三河の知多湾に面する碧海台地の先端に立地する縄文晩期の貝塚を伴う遺跡で、人骨はこれまでに15体発掘されている。

叉状研歯は、刈谷市教育委員会主催で1969年に実施された発掘の際に出土した人骨のなかから1例見出されている[江原・渡辺 1972: 95]。

24 本刈谷EH1号人骨*(図3) 30歳代前半の男性で、上顎右中切歯に3条、左中切歯に2条、左右側切歯に各1条の截痕がのこされている。切歯の「歯冠部が自然咬合面から、すでに30%以上磨耗しており、その外側ほど磨耗度はいちじるしい」ために、截痕は歯冠唇面のエナメル質にわずかにのこっているにすぎない。しかし、元々、截痕が浅かった可能性も否定できない。右中切歯の3条の截痕だけは細く繊細で、左より新しく彫った可能性も考えられる。抜歯は、上顎左右の犬歯と第1小臼歯、下顎左右の中切歯・犬歯と第1小臼歯であって、2C2I型に属する。京都大学霊長類研究所保管。

g 愛知県名古屋市緑区・雷矢切遺跡

大日川に面する旧鳴海町北部丘陵の西端に位置する縄文晩期初頭から中葉にかけて営まれた貝塚遺跡で、1927年以来20体以上の人骨が出土している[吉田・増子 1966]。叉状研歯は野村三郎氏の採集品のなかから1例検出されている。

25 雷NM2号人骨*(図4) 遊離した上顎左中切歯1本に2条の截痕が認められるにすぎない[小栗 1933: 17~18]。現全長19.1mm、截痕は近心側は舌面エナメル質の内側まで一部及んでいる。遠心側は唇面エナメル質から始まり象牙質で終わっている。截痕は、本来は歯冠唇面から舌面に及ぶ深いものであったらしいが、咬耗により、現在は舌面にはまったくみられない。遠心側に斜めに咬耗した切縁の形状からすると、抜歯は下顎の全切歯を抜いた4I型であったと推定される。名古屋市博物館保管。

h 大阪府藤井寺市惣社町・国府遺跡

大和川が河内平野に出てきたばかりの所の段丘上に立地する遺跡で、1917年以来、縄文前期・晩期、弥生中期人骨が成人に限っても、これまで88体発掘されている[池田 1986]・[池田 1988]。縄文晩期と同じ抜歯型式をもつ13体のなかに叉状研歯例は3体含まれている。抜歯は、4I系が女性5、2C系が男性5で、型式と性は完全に一致している[春成 1985: 38~39]。

26 国府KG 9号人骨*(図4) 最初に検出された又状研歯例である[小金井 1919: 356~358]。1919年に小金井良精・柴田常恵両氏によって発掘されたもので、小金井氏は「性を定めるに必要な骨盤がないからして、男女何れとも言い難い」、「年齢は25乃至30位」とした。その後、筆者は小泉清隆氏に鑑定を依頼し、女性で20~24歳という結果を得た。又状研歯は、伊川津SZ 44号人骨と並ぶもっとも保存良好で典型的な標本である。中切歯の2条、側切歯の1条の截痕は、歯冠唇面から舌面に達し、切縁を深く切り込んでいる。抜歯は上顎は左右犬歯、下顎は全切歯と左右犬歯に施した4I2C型である。左右の側切歯は下顎左右の第1小臼歯に接触するために咬耗が進んでいるが、対応歯をもたない中切歯の咬耗は比較的軽度である。東京大学総合研究資料館蔵。

27 国府SM 3号人骨*(図4) 1958年に山内清男・島五郎・鎌木義昌氏らによって発掘された際に出土したものである[島 1963: 34]。壮年男性として報告された。多賀谷昭氏によると、30代である。又状研歯は遺存していた上顎右中・側切歯にそれぞれ2条、1条の截痕がある。ともに歯冠唇面から舌面まで達する深いものである。抜歯は上顎の左右犬歯、下顎の左右中切歯と両犬歯に認められる2C2I型である。上顎はかは大阪市立大学第二解剖学教室保管、下顎は行方不明。

28 国府OS 1号人骨*(図4) 1970年に大阪府教育委員会による調査時に出土した女性人骨である[大阪府教委 1971]。年齢は当初、若年として報告されたが、その後、池田次郎氏は壮年と訂正した[池田 1986: 4]。片山一道氏によると、25~35歳である。又状研歯は、上顎中・側切歯にみられるが、左側切歯は紛失している。左中切歯の2条の截痕は歯冠唇面から舌面まで達する深いもので、咬耗もあまり進んでいない。右中切歯は劣化が進んでおり、そのために截痕は歯冠唇面にしかのこされていない。右側切歯の1条の截痕も十分に深いものである。抜歯は、上顎では左右の犬歯と第1小臼歯、下顎では全切歯・犬歯に行なった4I2C型である。京都大学自然人類学研究室保管。

3 又状研歯の特徴

又状研歯の分布 現在までのところ、又状研歯人骨は、愛知県の7遺跡から25例、大阪府の1遺跡から3例検出されている(図5)。そして、愛知県と大阪府の間からはまだ発見されていない。しかし、それはこの間から縄文晩期の人骨がほとんど発掘されていないからであろう。この時期の人骨の出土は、岐阜県1体、滋賀県2体、三重

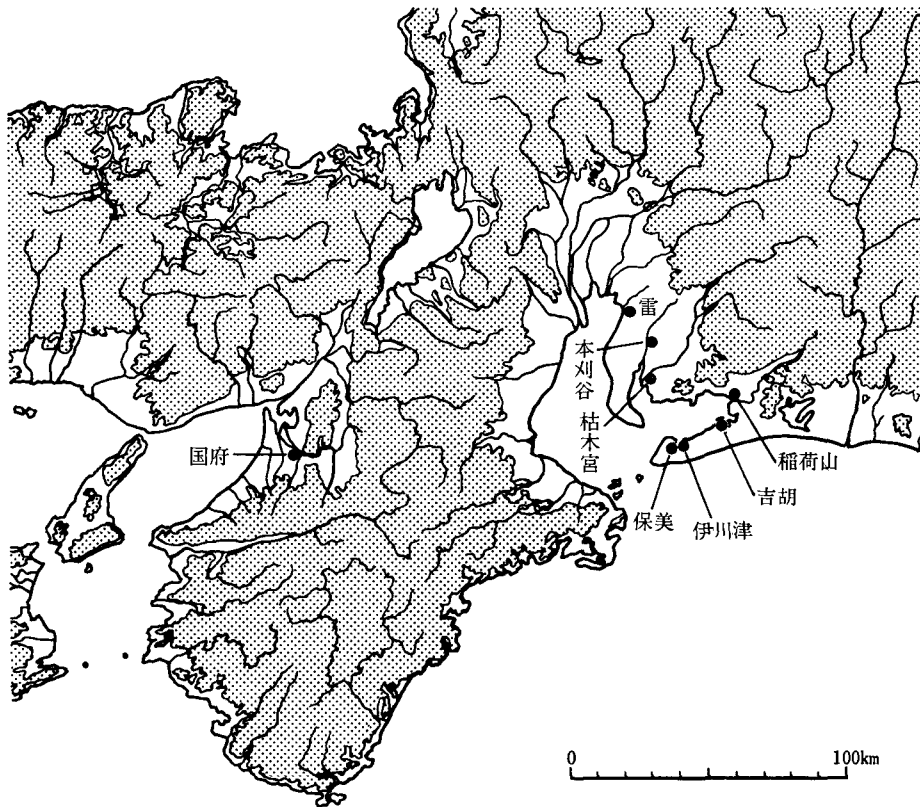


図5 叉状研歯人骨の分布

Fig.5

県・京都府・奈良県皆無，和歌山県2体というのが実情なのである。なお，同じ大阪府東大阪市日下遺跡から約10体の抜歯人骨が出土しているにもかかわらず，叉状研歯が見出されていないのは，そのうち4Ⅰ系抜歯が2例だけという発掘区の偏りに主要な理由があるからだと予想される。

その一方，静岡県以東の東日本でまだ見つかっていないのは，この習俗が存在しなかったからだと考えるほかない。

同様に，西日本では抜歯人骨を109体以上出土した岡山県笠岡市津雲遺跡から，ただの1例も叉状研歯が報告されていない事実は，中国地方以西にまでこの習俗が普及しなかったことを示している。

したがって，叉状研歯の分布は，東海地方西部から近畿地方と考えてまちがいはないであろう。⁽⁴⁾

叉状研歯の時期 叉状研歯人骨の所属時期は，それが発掘された遺跡出土の土器型式によって，ほとんどの例が縄文晩期と認定され，それ以外の時期の可能性が考えら

叉状研歯

れる例はまったく存在しない。国府SM3号人骨について、島五郎氏は墓坑内とその周辺から縄文前期末の土器小片が出土した事実をもって、その時期の可能性を考えている[島 1963: 36]。しかし、古い包含層を切って墓坑を掘れば、墓坑内に埋葬より古い時期の土器が混じることは、いくらでもありうる。この人骨も抜歯型式によって縄文晩期とすべきである。

むしろ、問題は保美・伊川津・吉胡・稲荷山などの諸遺跡から、弥生前期の条痕文土器（櫛王式、水神平式）が出土していることであって、叉状研歯のなかにこの時期までくだる例があるかどうかの検討が必要である。

山内清男氏は、叉状研歯人骨3体を出土した吉胡遺跡の第2トレンチでは、「晩期の中頃」（大洞C₁式併行）に混土貝層が堆積し、その時期に墓坑も掘られているとみて、埋葬はこの時期に行なわれたと判定している[山内 1952: 101]。

伊川津遺跡のSZ44・45・46号人骨は基盤層上面に墓坑底があったが、私が参加した1984年の発掘調査時の経験を参考にすれば、この地方の貝塚では縄文晩期前葉ないし中葉での埋葬は、基盤層上部まで墓坑を掘りこんでいるのに対して、それ以降の埋葬はその上部の貝層中に墓坑の底をもっているのが普通である。埋葬の時期は本来ならば、墓坑を掘りこんだ面を確認して決めるべきであるが、便宜的に上記の基準を用いるかぎり、叉状研歯人骨のなかに弥生前期に属する疑いのあるものはない。さらに、縄文晩期でも後葉までくだる可能性をもつ例も挙げることはできない。したがって、叉状研歯の習俗は縄文晩期でも初頭から中葉にかけて盛行し、東海地方西部における後期末ないし晩期初頭に始まる大規模な貝塚遺跡の消長と同一歩調をとっているといつてよいと思われる。これを抜歯の習俗との関連でいうと、4I系と2C系の対立・結合の始まりと軌を一にして出現した、とみることができよう。

研歯の方法 小金井良精氏は最初の報告のなかで、切歯に截痕を施す方法についてすでに述べている。すなわち、「単に石器を用いて斯様な細工をしたものであろう。…予は燧石の鋭き破片を以て試みた処が此を以て彼を磨り減らし截痕を造ることが立派に出来る」と[小金井 1919: 357]。筆者が叉状研歯例を観察したところでも、小金井氏の見解は妥当と思われる。特に、伊川津KG9号の左右中切歯や同SZ45号の右中切歯の近心側の截痕は、細く鋭い線であって、いかにも同遺跡から出土するチャートのような硬い石の剝片を利用したことを思わせる。完成した截痕は、切縁で幅2mmほどであるから、剝片によって時間をかけて歯冠の唇面溝に沿って溝を彫り、さらに切縁にも逆V字形の切れ目をいれたのであろう。

なお、切歯にこのような溝を一気にいれるならば、象牙質の神経が露出し歯痛をも

たらずことがある。また、截痕が明らかに不十分なものが少なからず存在する。このようなことを考えると、研歯はおそらく何回かに分けて完了させたと思われる。しかし、数箇月もあればそれは十分に可能であったろう。したがって、叉状研歯が未完了のまま終わっている例は、15～16歳の研歯中に死亡した可能性も考えられる伊川津KG22号以外は、何らかの事情により研歯途中で止めてしまったものと理解すべきであろう。

叉状研歯の起源 叉状研歯は、上顎の中切歯に2～3条、側切歯に1条の截痕を施すのを特徴とする。ところが、中切歯と側切歯にはそれぞれ2条の唇面溝が存在し、個人差がひじょうに大きいけれども、人の永久歯が出齦した直後の中切歯の切縁には2

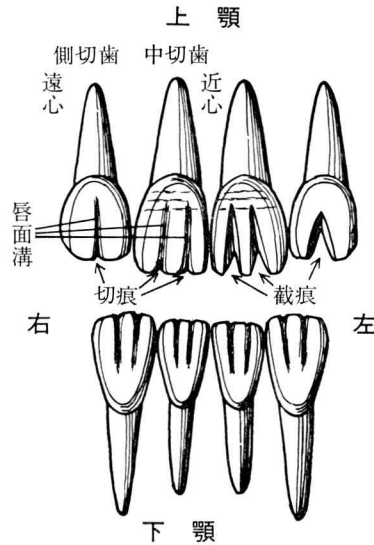


図6 永久歯が出齦したすぐ後の上顎側切歯と叉状研歯 Fig.6

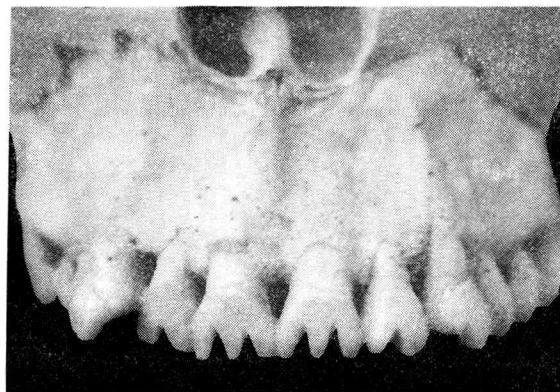


図7 メキシコ・ツィンツンツァン遺跡出土人骨の叉状研歯（レプリカ） Fig.7

箇所、側切歯の切縁にも2～1箇所の切痕が存在するばあいがある(図6)。これらの特徴は軽微ではあるが、叉状研歯の形状にきわめてよく類似する。これらの切痕は数年もすると、咬耗により目立たなくなるのが普通である。国府KG9号を観察した小金井良精氏が、叉状研歯の起源を、「故らに本来の形に擬えて、これを強めた様にも見える」と説明したのは、まことに卓見であったと思われる。日本とまったく同じ叉状研歯形態が中央アメリカ [ROMERO 1958]・[ROMERO 1970] やアフリカ [LIGNITZ⁽⁵⁾ 1919～1924] に存在する理由も、ここに求められるであろう(図7)。しかし、もちろん、そのことと叉状研歯が習俗として成立・普及したこととは、直接結びつくもので

叉状研齒

表1 叉状研齒集成表

Tab.1

(M・Λは叉状研齒, I・C・Pは抜齒, —は齒が植立, ×は齒槽開放, △は齒槽閉鎖, /は欠失を示す)

番号	人 骨 名 称	性	年 齡	研齒・抜齒状態	研齒度	抜齒型式	備 考
1	保美MY3号	♂	壮年	$\frac{--C \times M M}{--- \times \times \times \times ---}$	4	0 型	
2	保美SZ1963-7号	♂	老年	$\frac{/PC \times \times M \times CP \Delta}{- \times \times I I I I \times /}$	4	4 I 型	
3	伊川津KG9号	♀	壮年	$\frac{/ \times M \times \times C - \times}{--- I I I I ---}$	2	4 I 型	
4	伊川津KG21号	♀	壮年	$\frac{--C \times \times M \times C --}{--- I I I I ---}$	4	4 I 型	25~30歳
5	伊川津KG22号	♀	若年	$\frac{/ M M I ---}{--- I I I I ---}$	1	4 I 型	15~16歳, I ² には截痕なし
6	伊川津KG番外6号	♀	熟年	$\frac{/ M}{--C I I /}$	4	4 I 2 C 型	
7	伊川津SZ44号	♂	壮年	$\frac{-PC \Lambda M M \Lambda CP -}{- \times \times I I I I ---}$	4	4 I 型	19~20歳
8	伊川津SZ45号	♂	壮年	$\frac{----M M - C --}{--- I I I I ---}$	2	4 I 型	25~29歳, I ² には截痕なし
9	伊川津SZ46号	♂	壮年	$\frac{----M M}{--- I I I I ---}$	2	4 I 型	30歳, 右 I ² には截痕なし
10	伊川津SZ213号	♀	壮年	$\frac{--C \Lambda \times M \times C --}{--- I I I I ---}$	4	4 I 型	
11	伊川津IK19号	♂	熟年	$\frac{/ M \Lambda C --}{--- I I I I ---}$	4	4 I 型	左 I ¹ は3条の截痕
12	吉胡KY21号	♀	熟年	$\frac{\Delta PC - \times M I C P \Delta}{- \times C I I I I C \times -}$	4	4 I 2 C 型	右 I ² の截痕は不明
13	吉胡KY35号	♀	壮年	$\frac{--C \Lambda M \times \Lambda C \times \times}{--- I I I I ---}$	4	4 I 型	
14	吉胡KY85号	♂	熟年	$\frac{--C - M M - C --}{--- I I I I -- \Delta}$	3	4 I 型	I ² の截痕は不明

番号	人 骨 名 称	性	年 齢	研 歯 ・ 抜 歯 状 態	研 歯 度	抜 歯 型 式	備 考
15	吉胡KY120号	♂	壮年	$\frac{\Delta P - - M}{- - - I I} \mid \frac{\times - C \times \Delta}{I I - \times \Delta}$	3	4 I 型	I ² の截痕は不明
16	吉胡KY280号	♂	熟年	$\frac{- P C \times M}{- \times C I I} \mid \frac{M - C P -}{I I C \times \times}$	3	4 I 2 C 型	左 I ² の截痕は不明
17	吉胡BN13号	♀	熟年	$\frac{\diagup C \times M}{- - - I I} \mid \frac{\Delta \wedge C \times \diagup}{I I - - \Delta}$	2~3	4 I 型	
18	吉胡BN17号	♀	熟年	$\frac{\times \times C \times M}{- - - I I} \mid \frac{M \times C \times \Delta}{I I - - -}$	3	4 I 型	
19	吉胡BN21号	♀	熟年	$\frac{\times - C \wedge M}{- - - I I} \mid \frac{\times \times C - \times}{I I - - -}$	3	4 I 型	I ² の截痕は写真では1条
20	稲荷山KY35号	♂	熟年	$\frac{\times \times C \times M}{\diagup} \mid \frac{M \wedge C}{\diagup}$	4	4 I 型?	
21	稲荷山KY37号	♂	熟年	$\frac{- - C \times M}{\times \times - I I} \mid \frac{\diagup}{I I \times - -}$	3	4 I 型	
22	枯木宮OG5号	♀	壮年	$\frac{\diagup - C - M}{- - \times I I} \mid \frac{M - C - -}{I I \times \times -}$	2	4 I 型	35~40歳, I ² の截痕は不明
23	枯木宮NS9号	♀	若年	$\frac{- P C \times M}{- - - I I} \mid \frac{M - C P -}{I I - - -}$	1~2	4 I 型	17~18歳, 左 I ² には截痕なし
24	本刈谷EH1号	♂	壮年	$\frac{- P C \wedge M}{- P C - I} \mid \frac{M \wedge C P -}{I - C P -}$	2	2 C 2 I 型	30~34歳, 右 I ¹ は3条の截痕
25	雷NM2号	?	壮年	$\frac{\diagup}{\diagup} \mid \frac{M}{\diagup}$	4	4 I 型?	遊離歯1本のみ
26	国府KG9号	♀	壮年	$\frac{- - C \wedge M}{- - C I I} \mid \frac{M \wedge C - -}{I I C - -}$	4	4 I 2 C 型	20~24歳
27	国府SM3号	♂	壮年	$\frac{- - C \wedge M}{- - C - I} \mid \frac{\times \times C - -}{I - C - -}$	4	2 C 2 I 型	30歳代
28	国府OS1号	♀	壮年	$\frac{\times P C \wedge M}{\times \times C I I} \mid \frac{M \times C P -}{I I C - -}$	4	4 I 2 C 型	25~35歳

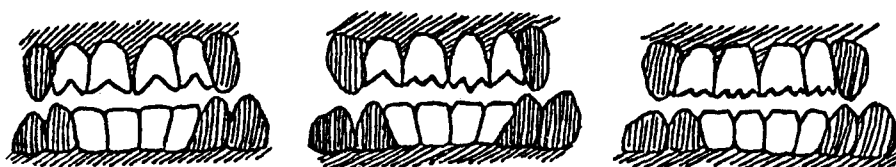


図8 アフリカの叉状研歯 [FÜLLEBORN 1901]→[LIGNITZ 1919～1920]

Fig.8

はない。むしろ、歯すなわち自らの身体の一部に傷をいれて、他と区別する一方、傷をいれた者同士の同一性を示威するところに、その本質的な起源は求められなければならない。このような立場から最初に、表1に基づいていくつかの統計結果を示しながら叉状研歯の特徴を明らかにしておきたい。

性と年齢 まず、叉状研歯人物28例の性についてみると、男性13例、女性14例、不明1例となっている。すなわち、男女の割合はほぼ1対1であって、どちらかの性に偏るという傾向は見出せない。

次に、死亡年齢についてみると、15～19歳3例、20～39歳11例、40～59歳9例、60歳以上1例となっている。すなわち、20歳未満の人物にも叉状研歯は施されているのであって、叉状研歯の人物は「集団の長老」といった単なる印象論では説明できないのである。

叉状研歯の諸段階 叉状研歯は、中・側切歯の唇面から舌面まで達する深い切り込みの存在つまりフォーク状の加工をもって完了したとみなすならば、中切歯の唇面にのみ浅い截痕をもつ例や側切歯に截痕をもたない例は未完了ということになる。しかし、なかには切縁の切り込みは浅いが研歯は完了していたとみられる例もある。そこで研歯の進行段階を、1～4度の4段階に分けて記述していきたい(表1)。そして、1，2度は未了，3，4度を完了と判断しておきたい。ただし、切歯の咬耗が進んだ結果、切縁の切り込み具合を知ることが不可能となっている例もある。そのばあいには、例えば2～3度と記載することにする。この分類によれば、叉状研歯28例は、研歯完了22～20例、研歯未完了6～8例となる。ほぼ確実に未完了の7例の年齢は、伊川津KG22号は15～16歳、伊川津SZ45号は25～29歳、枯木宮NS9号は17～18歳、のこり4例は壮年である。その一方、伊川津SZ44号は19～20歳で完了、国府KG9号は20～24歳で完了しているから、研歯の完了までに何年間もかかるとは考えにくい。したがって、伊川津KG22号と枯木宮NS9号はともかく、他の5例は研歯途中であって、もう少し年をとったら研歯が完了する、というものではなさそうである。彼らの研歯は何らかの理由によって途中で止められたと考えるべきであろう。

叉状研歯は1度施すと、截痕のついた歯冠を研磨して短くしないかぎり消すことはできない。その意味で叉状研歯は抜歯と同様、人工による永久的な標識である。ところが、叉状研歯例のなかに、枯木宮OG5号、本刈谷EH1号のように切縁を研磨して歯冠部を短くしたと報告されている例がある。しかし、枯木宮OG5号のばあいも、下顎を左右に動かせば、上顎中切歯と下顎犬歯とは咬合するので、下顎の全切歯を抜去しても、上顎の中・側切歯は咬耗する。また、本刈谷EH1号のばあいも、筆者が観察したかぎりでは、他と同様、下顎側切歯との咬合による磨滅といかにして区別するか、難しい問題のように思われた。

叉状研歯と抜歯 抜歯型式について整理してみよう(表2)。叉状研歯は、4I型と4I2C型を含む4I系が23例、2C2I型を含む2C系が2例というように、4I系に集中している。そして、2C系のばあいも2C型の例はまったく知られていない。

表2 叉状研歯の抜歯型式(* 不明の2例はおそらく4I型)

Tab.2

抜歯型式	計	性	例数	抜歯系列	計	性	例数
4 I 型	18	男 性 女 性	8 10	4 I 系	23	男 性	9
4 I 2 C型	5	男 性 女 性	1 4			女 性	14
0 型	1	男 性	1				
2 C 2 I型	2	男 性	2	2 C 系	2	男 性	2
不 明*	2	男 性 不 明	1 1	不 明	2		2
総 計	28						

ところが、これらの遺跡においては、抜歯型式はほぼ1対1の割合で4I系と2C系が共存しているのである。例えば、吉胡遺跡では4I系が65例(男37, 女28)、2C系が49例(男29, 女20)となっている。また、叉状研歯例は出土していないが、岡山県笠岡市津雲遺跡では、4I系が33例(男9, 女24)、2C系が35例(男23, 女12)となっており、いっそう1対1の割合に近い。

したがって、叉状研歯が抜歯の4I系に偏っているという事実はいよいよ際だった特徴となる。

叉状研歯の割合 では、叉状研歯の人物は1集団に何人位いたのであろうか。鈴木尚氏は抜歯された人物のうち「恐らく2～3%程度」としたが、それは当たっているであろうか。叉状研歯は、上顎の中・側切歯が少なくとも1本残存していないかぎ

叉状研歯

り、その存在を確認できない。ここで抜歯例と叉状研歯例との割合を正確に示すことができる吉胡遺跡をまず、例にとろう。抜歯例は120（男性68，女性51，不明1）に対して叉状研歯例8であるから、その割合は6.7%である。しかし、中・側切歯が遺存し叉状研歯の有無を観察しうるのは61例（男29，女30，不明2）にすぎず、このばあいには13.1%となる。

正確な抜歯例を示すことはできないが、伊川津遺跡のばあいは、頭骨を欠いた人骨や幼児骨をも含めた183体のうち8例に叉状研歯がみられる。すなわち、4.3%である。吉胡遺跡を同じ基準でいうと、340体のうち8例に叉状研歯がみられるから、2.3%となる。したがって、発掘人骨の数が吉胡遺跡のほぼ半数に相当する伊川津遺跡では、単純計算をすると、叉状研歯は抜歯された成人のうち25%以上の人に施されているということになる。「25%以上」は多すぎるとしても少なくとも10%はこえるとみたほうが自然であろう。

叉状研歯を2例出土している稲荷山遺跡のばあいは、叉状研歯の有無を確認できるのは13体（男10，女2，不明1）であるから、やはり15.3%の高率となる。そして、国府遺跡では縄文晩期の抜歯型式をもつ12体（男7，女5）のうち、上顎中・側切歯の遺存していたのは7例にすぎなかったが、叉状研歯は3例に認められたから、実に42.9%にも達する。

別の方法によって、1集団に同時に存在する叉状研歯人物の数を推定してみよう。伊川津遺跡では叉状研歯を施した男性3体合葬例と女性2体合葬例が発掘されている。前者のばあいは、研歯未了と思われるS Z 45号のような例を含んでいるとはいえ、同時に合葬されている以上、叉状研歯の3人はいっしょに生活していたのである。当時の伊川津集団の総人口を30～40人と見積もるならば、そのうちに叉状研歯の男性は7.5～10%含まれていたわけである。

さらに、伊川津集団の成人の人口を総人口の約半分15～25人と仮定するならば、叉状研歯の人物は12～20%を占めていたことになる。すなわち、5～8人に1人は叉状研歯を施されていたのである。

ところで、叉状研歯例の男女比はほぼ同じである。男性と女性を交互に、そしてどちらかが死亡したら反対の性に施す、というのでなければ、1集団内に男女の叉状研歯人物が共存した可能性がでてくる。伊川津遺跡を例にとれば、それぞれ合葬された3体の男性と2体の女性が、同時に生きていた可能性は絶無とはいえない。すなわち、成人15～25人中に5人、つまり成人4～7人につき1人の割合で叉状研歯人物がいた可能性はあるのだ。叉状研歯人物の性格づけについては、それが2～3%程度で

はなく、20%に近い頻度で出現することを前提にして考察しなければならないのである。

4 叉状研歯の意義

叉状研歯と長老 叉状研歯が抜歯とちがうところは、その割合が抜歯人骨すなわち成人の約20%にとどまるという点である。

では、1集団に男女あわせて5人前後いた叉状研歯を施した特別な人たちは、何者だったのであろうか。

未開社会では、集団規制、すなわち「逸脱的行為の統制と協調的行為の管理」のためにある種の権威が利用されるが、それは「年長」という地位であるばあいが一般的である。そこで、年長の男性はその他の者より権威ある地位を占めることになるが、老人が年下の成人男子よりも優越しているのは、より豊富な経験と知識の保有による、といわれている〔サーヴィス 1972: 86~87〕。

縄文社会においても、長老を集団の指導者と想像し、叉状研歯の人物をそれに擬定する考えは、おそらくこのような民族学の知識を大なり小なり参考にしていると思われる。しかし、叉状研歯のなかには、すでに10代後半にそれを行っていた証拠が少なからずある以上、叉状研歯を行なうにあたって「年長」という条件が付与されていたとは、とても考えられない。また、上顎の犬歯は抜去されているが下顎の抜歯がなされていない0型を、筆者のように、成年式は経たが婚姻前に死亡した例とみなすならば〔春成 1973: 28~30〕、保美MY3号のばあいは未婚者が叉状研歯を施していたことになる。そう考えてよければ、2C2I型で叉状研歯の2例のばあいも一応の説明が可能となろう。すなわち、成年式終了後に叉状研歯を行なったが、その後、予定が変更されてその人物は他集団のもとへ婚出しなければならなくなった時に、下顎の犬歯が抜かれ、2C型になったと考えるのである。

いずれにせよ、各種の経験を十分に積んだのちにその集団の有力者へと成長し、衆目の一致するところによって長老に推挙され、そこで叉状研歯が施される、といったものではない。彼らの年齢を無視して単純に、叉状研歯を施された人＝長老とみなすことはできないのであって、叉状研歯人物の存在を根拠にして、縄文晩期には長老によって集団規制が行なわれていた、と一般化して主張することは適切ではない。

墓地での分布状態 従来、叉状研歯は、その出現頻度が2~3%とする説に影響されて、ごく少数の特定個人の出現を示す材料として使われてきた。叉状研歯ははたし

叉状研歯

て特定個人の存在をどの程度まで示すものなのであろうか。それを検討するには、叉状研歯人骨を集団全体の人骨の中に位置づける必要があるが、それは「死者の集落」である墓地における叉状研歯人骨の分布状況をおさえるほかに途はない。

まず、吉胡遺跡についてみることにしよう。吉胡遺跡は、清野謙次氏らによる大発掘と、文化財保護委員会によるトレンチ発掘によって、墓地の約 1/2 が調査されていると推定される。筆者は、この墓地は新旧 2 期の環状墓地が一部重複する形で形成されていると予想している[春成 1979: 40~43]。そう考えてよければ、墓地の規模は東西約 80m、南北約 65m を測ることになる (図 9 左)。

吉胡遺跡で 1951 年に叉状研歯人骨が出土したのは、長さ 20m、幅 2.5 m の第 2 トレンチの中央からだけである (図 9 右)。このトレンチから発掘された人骨についてみると、叉状研歯 3 体のほか 6 体の人骨があるが、6 体の内訳は、BN10号が幼児、12号が性不明、14号が幼児、18号が男性・抜歯不明、23号が女性・4 I 2C 型、25号が男性・4 I 型となっている。ところが、以上のうち成年に達している 4 体は上顎中・側切歯はすべて失われているのであって、叉状研歯はないのではなく、その有無は不明として扱うべきものである。

同様に第 2 トレンチの東側の清野氏発掘区をみると、叉状研歯の K Y 85 号の周辺に埋葬された K Y 81・82・83・84・88・89・90・92・93・94 号の 10 体のうち 7 体までは上顎中・側切歯を欠いており、叉状研歯の有無は検査できない。さらに、西側の K Y 35 号と第 2 トレンチの間の K Y 33・36・38・43・44・46・47 号の 7 体については上顎中・側切歯を 1 本でものこしている人骨は 1 例もない。したがって、第 2 トレンチ付近では叉状研歯人骨が現在以上に集中していた可能性も否定できない。

叉状研歯が確認された 8 体のうち K Y 280 号を除く 7 体の人骨は、墓地ではほぼ東西方向の一線上に並んで分布しているが、両端間の距離は約 23m、そして、やや離れた位置に埋葬されている K Y 120 号を除いたばあい、K Y 21 号と東端の K Y 85 号の間の距離は 13m である。叉状研歯人骨がいかに特定の場所に集中しているかは、この点からも明らかである。

その特定の場所の意味をより明確にするために、吉胡遺跡の墓地を抜歯型式の異同に基づいて群別すると、4 I 系と 2C 系の小群が西環では交互に、東環では内・外に配列されて環状にめぐっていると推定される。叉状研歯 8 体の分布状態をみると、女性 5 体は西環の 2 群に集中しているのに対して、男性 3 体はそれぞれ別の群に分散しており、対照的である。

同じことは稲荷山遺跡についてもいえる。ここでは、叉状研歯の K Y 35・37 号の 2



図9 吉胡遺跡の墓域形態と又状研歯人骨の出土地点 (右は第2トレンチの拡大図)

Fig.9

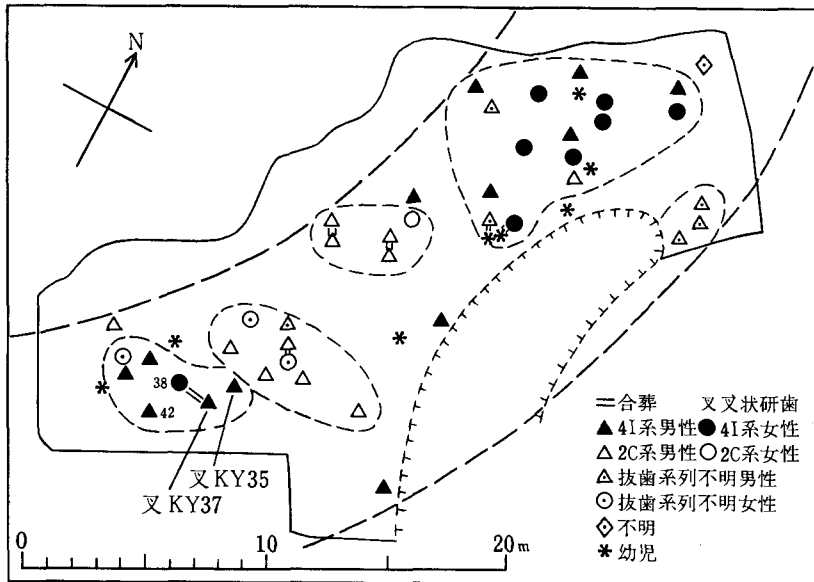


図10 稲荷山遺跡の墓域形態と叉状研歯人骨の出土地点

Fig.10

人骨は、約1mしか離れていなかった。そして、その周囲から4体の4I型の抜歯人骨が掘り出されたが、それらも上顎の中・側切歯が1本でものこっていたのはわずかにKY38・42号の2体にすぎない。稲荷山遺跡では、人骨が出土した範囲は、東西約15m、南北30mにわたっており、4I型の抜歯人骨は2箇所に分かれて集中している。しかし、もう一方からは叉状研歯例は検出されていない(図10)。

また、埋葬人骨の分布図が公表されていないために正確にはいえないが、伊川津遺跡では、1922年の小金井良精氏の発掘区内からは叉状研歯の女性4体が検出されており、吉胡遺跡でのあり方を想わせる。ただし、この遺跡では、1936年の鈴木尚氏の発掘区からも、叉状研歯の男性3体の合葬例が検出されている。

いずれにせよ、叉状研歯人骨は墓地においては、特定の埋葬小群内に集中するという傾向は、はっきりと表われているのである。この埋葬小群が何に対応するものであるかが問題であるが、林謙作氏の主張〔林 1977〕・〔林 1980〕を参考にして、私も世帯に対応するものと考えたい。

そこで、叉状研歯人物は成人4、5人につき1人はいたとする推定と合わせ考えるならば、叉状研歯人物は、1人で集団の中に存在するのではなく、複数で特定の世帯の構成員として、そしておそらく有力な世帯のそれとして存在すると結論づけられる。

ただし、吉胡集団では、叉状研歯は女性のばあいは、特定の世帯から出身するが、

叉状研歯

男性のばあいは、出身世帯が変わっていくとみられる。つまり、女性の地位は世襲的であるのに、男性の地位はそうではないのである。その一方、伊川津集団ではその地位は男女とも世襲的な傾向をもっていた可能性がある。

しかし、その世帯の構成員のうち2C系抜歯を施した人すなわち婚入者は叉状研歯をもたないのが原則であるから、厳密に言えば世帯ではなく血統とみなすべきであろう。そう考えてよければ、伊川津KG21・22号の女性2人の合葬例、同SZ44・45・46号の男性3人の合葬例については、同時に死亡した人々のお互いの年齢のひらきがせいぜい10歳どまりであり、すべて4I型の抜歯であることから、前者は姉妹、後者は3人兄弟とする想像も可能である。そのばあい生物学的な父は異なっているともよいわけであるが、人骨の遺伝的形質などを用いて検証されるべき問題として、提示しておきたい。

叉状研歯の継承 伊川津SZ44・45・46号人骨の3体は、一つの墓坑内に合葬されていた。この3体はいずれも叉状研歯を施していたが、20歳前の44号の研歯は完了しているのに、かえって年をとっている25～29歳の45号、30歳の46号の研歯は未完了であった。装身具も、44号が耳飾・首飾・足輪を着装していたのに対して、45号は右腕に腕輪を着けていただけで、46号にいたっては何も着けていなかった。

それに対して、伊川津KG20・21・22号の3体合葬人骨のばあいは、研歯完了の21号は25～30歳、研歯未了の22号は15～16歳であって、年齢差に応じたいわば正常なあり方を示していた。

伊川津SZ44・45・46号人骨のあり方は何を示しているのであろうか。この3体合葬墓の周辺の人骨の出土状況についての詳細が報告されていないために、推定で述べなければならないのは残念であるが、この合葬墓が4I系抜歯人骨の埋葬小群のなかに含まれていたことはほとんど確実である。私はかつて、彼らは生前は1棟の住居に住み一妻多夫の兄弟を核とする複婚家族を営んでいたと推定したことがある[春成1982]。あるいは、そこまで考えるのは穿ちすぎだとすれば、2～3棟に分住していたとしてもよい。しかし、彼らが埋葬される時は、同じ埋葬区内に埋められたことは確かである。

45・46号の研歯はいつなされたのであろうか。45号を観察したところでは、右中切歯は近心側の歯冠長いっぱいには彫られた細長い1本だけは比較的新しいが、残りの截痕は古い。45・46号の研歯も44号と同様に10代に施したと考えるならば、彼らは研歯途中で身辺に何らかの変化が生じたと解釈したくなる。しかし、46号が10代後半のころ、45号は10代前半、44号はまだ10歳未満であったわけであるから、45号が10代後半

になって同じく研歯途中でやはり身辺の変化により中止する、という2回もの突発的な変化を想定するのも少し無理がある。それよりも、45号も46号も正式の継承者ではなく、代理者であったと考えたらどうであろうか。伊川津集団ではこの時は、叉状研歯の正統な地位の男性の継承者は、3人兄弟のなかで最年少の44号であると決まっていたが、44号が未成年であったためにその間46号と45号がその地位を順番に代行したと考えるわけである。そして、そのために2人に対してはいわば形ばかりの叉状研歯を施し、44号が10代後半に達し成年式を終了した時に44号には叉状研歯を一気に施したのではないだろうか。

このように考えてみると、先に叉状研歯人物は1集団に5人前後いた可能性があるとした点にも但し書きをつけておく必要がでてくる。つまり、それは研歯が完了した者と未完の者とを合わせた結果なのであって、ある一時点をとれば、実際に叉状研歯人物固有の任務についているのは、原則として男女各1人とみたほうがよいかもしれない。もしそうだとすれば、その男女は、抜歯型式がともに4 I型であるという事実から、その集団出身の姉弟、兄妹、父娘、母・息子といった関係にあったと推定して先に進もう。

まず、伊川津 S Z 44号が20歳未満であったこと、また保美 MY 3号が成年には達しているが未婚であったという推定を想起こすならば、姉弟や兄妹の関係だとすると、例えば10代後半の男女2人が叉状研歯を施した人物に固有の重要な活動に従うばあいも想定しなければならない。しかし、そのようなことが現実におこったとは、にわかに信じがたい。そうだとすると、この男女は年齢のひらいた2人ということになるから、それは父娘または母・息子の関係でなければならない。例えば、35歳の父と16歳の娘、あるいは36歳の母と18歳の息子が組になって、叉状研歯人物に課せられた任務を遂行していたが、そのばあいは親のほう为主导し、また縄文時代に特に発達した性別の活動のばあいはオバまたは姉、オジまたは兄が年少者を補佐したと考える。そして、親が亡くなると、その娘または息子の子供が叉状研歯者の地位に就く、すなわち、祖母—父—娘（自己）—息子—孫娘という男一女—男一女…の線＝血統をたどってその地位は代々継承されていった、と推論するのである（図11A案）。

しかし、その考え方にも、少数の事例に必要な以上にこだわって一般原則を導こうとして無理を重ねている点があるとすれば、議論をもう一度元に戻して、叉状研歯は基本的に姉弟（または兄妹）に施したという推定から出発することである。そして、どちらも若すぎるばあいは、まだ母・オジは生存しており、彼らが主導権をにぎっていたか、または若い2人を補佐していた、と考える。あるいは、伊川津 S Z 44・45・46

〔A案〕

〔B案〕

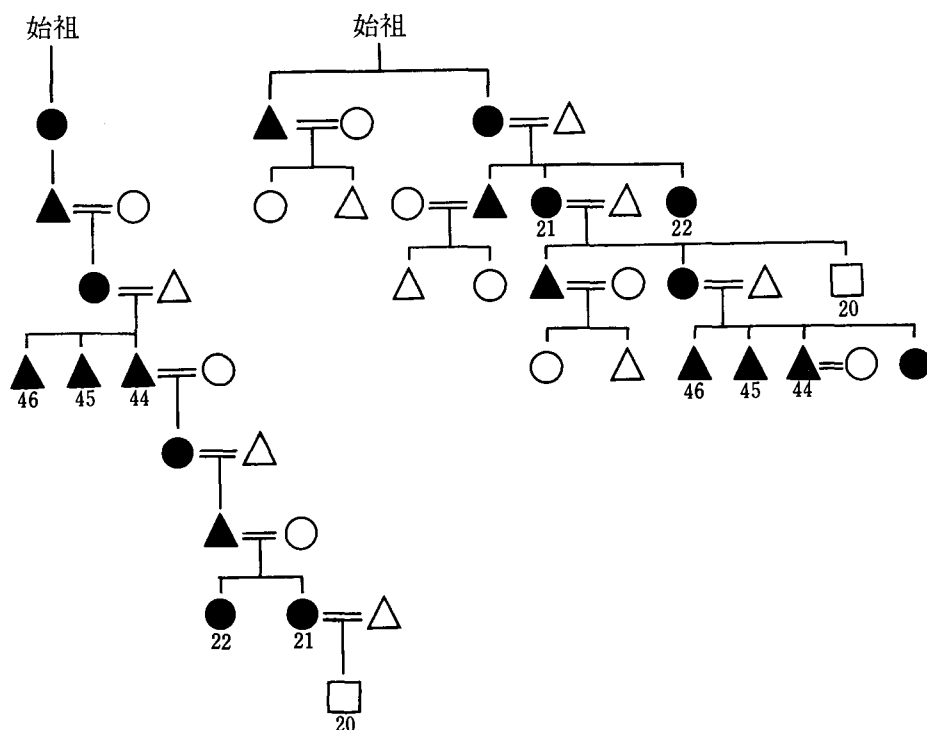


図11 叉状研齒の継承概念図（数字は伊川津例の仮定的位置を示す）

Fig.11

号のばあいは、若い44号を兄の45・46号が補佐していた、と考えるのである。

そして、その地位の継承法としては、仮に母系継承としたばあい、祖母とその弟（または兄）から母とその弟（または兄）へ、さらに娘（自己）とその弟（または兄）へという原則があった、と解釈することである（図11B案）。伊川津 S Z 44・45・46号については、45・46号は姉より年上、44号だけが姉より年下という関係にあった。ところが、伊川津集団出身の父が早く死亡したために、男性の継承者が必要になった時、正当な権利をもつ44号はまだ成年式を経っていない少年であったことから、2人の兄が順に代理を務め、44号の成長をまって、姉弟による正式の対ができた、と考えることもできる。

具体的な事例の解釈ともなると、おそらく以上のほかにもいくつかの仮説はたてられようが、ここでは叉状研齒は原則として姉弟（または兄妹）を軸として親から子へと直系的に継承された、とする考えのほうが可能性が高いとおきたい。

抜歯型式の分析から、縄文晩期の東海地方西部から近畿地方では、男女がほぼ1対

1の割合で婚出入する選択居住制がとられていた、と私はこれまで述べてきたが〔春成 1979〕・〔春成 1982〕, このような集団の一般構成員の婚姻居住様式は、特別の血統につらなる人々のそれと相互に規定しあう関係にあった、と考えることもできる。叉状研歯が何ゆえに東海西部から近畿地方においてのみ発達したのか、の問題を解くことは容易ではないが、これらの地方においてのみ抜歯様式の4 I系と2 C系が量的にはほぼ均衡を保っているところに、むしろその間の矛盾・対立が激しかったことを読みとるならば、選択居住婚という婚姻居住様式をもたらした要因の中にその糸口は存在すると予想される。

なお、叉状研歯を施した男性同士または女性同士の合葬はそれぞれ1例報告されているのに対して、男女同士の合葬例がまったく知られていない事実は、彼らが同時に死亡する機会がなかったことを暗示している。すなわち、叉状研歯の男女は別々の住居に住んで、それぞれ世帯をもっていた、と思われるのである。

叉状研歯の血統 さて、集団の統率者・指導者として個人が縄文時代にどこまで顕在化していたかは、縄文社会の成熟度を計る一つの目安ともなる。すでにみてきたように、縄文時代に特別な役割を演じたと推定される個人は、特別な血統につながることによって登場したと考えるものであった。それにしてもなぜ叉状研歯は早くも10代になされているのであろうか。叉状研歯人物の性格を解明していくうえで、重要な手がかりはここに秘められているのではあるまいか。

サーヴィスは、採集狩猟社会における常設的な首長の存在を否定している〔サーヴィス 1972: 89〕。ところが、叉状研歯に関するこれまでの分析結果は、縄文晩期の社会には、すでに特別な血統が存在したことを教えている。しかも、現在までに叉状研歯が検出されている遺跡の分布からすると、東海地方西部からおそらく近畿地方においては、このような特別な血統に属する人がすべての集落に存在したことを推定させるのである。

しかしながら、叉状研歯をもつ特別な血統につながる人たちが、いかなる任務をもっていたのかは、想像にゆだねるほかはない。歯に加工しているという点では、抜歯儀礼の執行者あるいは主宰者であったのではないかとごく自然に連想させる。抜歯が行なわれる機会を、成年、婚姻、葬送の儀礼の一環と考えるならば、それらは本人の地位にとってのみでなく集団全体の機構に何らかの変化と再編をひきおこすきわめて重大な意義をもっている〔春成 1973〕。特に婚姻は、他集団との関連においてのみ成立する以上、自集団の誰とどの集団の誰とがいっしょになり、彼らが婚後はどちらの集団に居住するかは集団間の関係の維持・更新と密接にかかわるもっとも大きな事

件である。又状研歯の人物がこの儀礼に関与するとすれば、彼らは、おそらくそれ以前の準備段階から関与していた、と考えてよいだろう。すなわち、又状研歯をもつ血統の人物は、集団の現在および将来に関するもっとも重要な事柄の準備と執行に大きな権限をもち、集団をまさに体現する指導的で代表的なメンバーとして、その地位を代々襲っていたと推察してもおかしくない⁽⁶⁾。

しかし、又状研歯を施した人物とその世帯との間、あるいはその世帯と他の世帯との間に、どの程度の不平等が存在したかは不明である。鈴木尚氏は、伊川津 S Z 44 号人骨が多数の装身具を着けていたことを強調しているが、しかし又状研歯で装身具を伴っている例は、28 例中 6 例にすぎない。しかも、そのうちの 5 例までは耳飾、貝輪、腰飾のうちのどれか一種だけである。その一方、装身具を着装しているが、又状研歯でない例も少なくない。したがって、又状研歯の血統の特殊性は自明としても、不平等とは直接には結びついていない。つまり卓越した首長や長老が析出していた証拠を挙げることは、それほど容易ではないのである。この点は、縄文時代における特別な身分の人物の性格と限界を如実に示すものといえよう。

又状研歯人物の組織 又状研歯は、それを施したあとはその痕跡が明瞭にのこるという点で、標識として通用することはいうまでもない。この容易に視覚に訴えうるという性格からすると、又状研歯は集団の内だけでなく集団の外でも機能した可能性がつよい。その標識としての意味は、ひとり当該集団内にとどまるものではなく、ひろくそれが分布する東海地方西部から近畿地方にいたるまで発揮しうるものであったと推定すると、又状研歯という特殊な習俗を生みだしたのも、特定の集団ではなく、全体的な組織の意志であったと考えるべきであろう。このことはまた、又状研歯を施された者同士の密接な結びつきを予想させる。つまり、又状研歯をもつという点で集団の他の成員たちから自己を区別する反面、又状研歯をもつ者同士は自己の居住する集団をこえて連帯していたのではないだろうか。そのように考えると、本刈谷 EH 1 号と国府 SM 3 号が、2C2I 型の抜歯で、他集団からの婚入者（あるいは婚出後の出戻り者）であったというのは、その集団（または他集団）にその血統をつぐ者がいなかった際の措置と説明できる。すなわち、又状研歯の血統の者が、姉または弟の子供であれば、男女各 1 人を決定するとのこりの兄弟姉妹は、婚出が可能であったから、自集団に又状研歯の地位を継承できる男性または女性が 1 人もいなかったばあい、他集団から又状研歯の血統の者を配偶者として迎えることもあった、と解釈できるのである。又状研歯の人々は、何らかの意味で選ばれた聖なる血統に属することを標示していたが、以上のように考えを進めてくると、彼らを紐帯として組織された機構がそ

のうえに存在していたのではないかと、との疑いが生じる。例えば、これらの地方に住む人々の組織を部族とすれば、その部族の会議や祭儀がもたれる時には、叉状研歯人物がそれぞれの集団の代表として中心的な役割を果たすといったこともあったのではないだろうか。

そう考えてよければ、叉状研歯を施される人々＝血統も、はたして個々の集団単位で独自に決められていたのか、という疑問もわいてくる。叉状研歯を許される血統は、個々の集団で決められたのではなく、むしろ部族の始祖につながる本家筋といった原理が先にあり、少なくともその資格は部族全体の了解を得ていたのではないだろうか。⁽⁷⁾さらに、臆測を付け加えると、叉状研歯を施した顔というのが、彼らの想像上の始祖の顔あるいは祖霊のイメージであったのではないであろうか。その意味からも、永久歯が出齦した6歳の頃にのみ顕著に現われる中・側切歯の唇面溝と切痕が、叉状研歯の原型であるという考えは、示唆的である。とにかくこの特異な歯牙変形の習俗の普及の背後には、それを維持する全体のつよい意志が存在していたこと、叉状研歯人物グループはこの地方の集団組織を維持していく中核的組織として機能していたことを考えさせるのである。

叉状研歯にかわるもの 叉状研歯は、東海地方西部～近畿地方においてのみ発達した地域限定をもつ習俗であった。では、他地方にはこれに代わる習俗なり統合の組織はなかったのだろうか。

岡山県笠岡市津雲遺跡では、貝製腕輪を着装した人骨が12体出土している。着装者はすべて女性であって、清野謙次氏発掘例では、女性37体のうち10体、27%の割合であった。抜歯型式との関係では、4I系が7体に対して、2C系は3体、他に0型が1体あった。津雲遺跡では、抜歯の4I系は男性9、女性24、2C系は男性23、女性12であったから、貝輪の着装が女性に集中していた理由の一つは、4I系に女性が多いこととも関連しているのであろう〔春成 1980a : 51～53〕。ところがそれとは別に、28号小児（5歳位）の遺体の近傍からアカガイ製の小形腕輪1個と蛇紋岩製小玉7個が出土し、その遺体に副えられたものと推定されている〔清野 1920 : 45・50～51〕。

同様に、小児に腕輪が伴った例は、愛知県吉胡・稲荷山の2遺跡でも知られている。吉胡BN14号は幼児の上肢直上に貝輪2個がおかれていたが〔中山 1952 : 140〕、稲荷山KY3号のばあいは、アカガイ製品が右腕に着装されていた〔清野 1969 : 142〕。また、秋田県能代市柏子所3号人骨にいたっては、新産児であったにもかかわらず、サルボウ製の腕輪5個が右手首にはめられていた〔大和久 1966 : 25〕。

貝輪の材料は、けっして稀少なものではないが、にもかかわらず着装者の数が少な

いことから判断すると、これらの地方では、貝輪の着装者はやはり特別な人たちであった可能性がつよい。すなわち、叉状研歯が普及しなかった地方では、装身具の着装が叉状研歯と同じ意味を付与されていたのではないだろうか。

特定世帯の出現 叉状研歯に示されるような人物は、いつごろから現われたのであろうか。ここで思い起こすのは、福岡県遠賀郡芦屋町山鹿遺跡で発掘された2体の壮年女性人骨である[九大解剖学教室編 1972: 57・81]。これは4号の乳児とともに3体合葬であるが、特に2号女性はサメ歯製の耳飾2、緑石の大珠1、叉状の鹿角製品（未完成品）2、貝輪19を身につけており、筭2、貝輪26着装の3号女性とともに「何か特異な身分ないし職能」をもつ人物、あるいは「呪術に卓越した集団の指導者的存在」と考えられている。ところが、その2号は「20歳そこそこ」の女性であった。こうしてみると、特別に豊富な装身具をつけていたり、特殊な歯の加工をしていた血統に相当するグループは、すでに縄文後期にまでさかのぼって認められるのである。

さらに考えると、装身具をつけた女性人骨が墓地内の1箇所からまとまって出土する例は、縄文前期に属する大阪府藤井寺市国府遺跡で知られている[西口 1983: 52～54]。ここでは、袂状耳飾をつけた熟年女性6体は、墓地内の約15m×8mの範囲内におさまっている。墓地の全体像がつかめていないので断定はしかねるが、墓地内の一角に集中する傾向は認められるように思われる。その判断にまちがいがなければ、特別な女性たちの出現はさらに縄文前期までさかのぼることになるだろう。

弥生時代の特別世帯 縄文時代に各集団に特別な血統に属する人を含む世帯が存在したことは、みてきた通りであるが、その系譜をひくとみられる特別な世帯は次の弥生時代にも存在する。

例えば、九州弥生時代中期の福岡県筑紫野市永岡遺跡の2列埋葬墓地のうちの、一部の埋葬小群だけは甕棺墓の数が異常に多いという現象を指摘できる。ここでは、大部分の埋葬小群の成人甕棺墓が6～8基からなるのに対して、一つの埋葬小群だけは14基もの成人甕棺墓からなる特別に規模の大きなものとなっているのである[春成 1984b: 10～16]。

同じく春日市門田遺跡でも、確認された5群のうち4群までは4～6基であるのに対して、1群だけは9基からなり、中心的な埋葬小群となっている。ゴホウラ製の腕輪を着けた2体のうちの1体(K59)が含まれていたのも、この小群である[同前: 16～19]。飯塚市立岩遺跡の中期後半に属する甕棺墓地の、前漢鏡副葬の甕棺を含む2群[春成 1988: 19～21]も、おそらく永岡遺跡や門田遺跡の中心的な埋葬小群に対

比されるものであろう。

そして、福岡市西区吉武高木遺跡で発掘された朝鮮半島製の多鈕細文鏡・銅剣・銅矛・銅戈などを副葬した木棺墓・甕棺墓の1群〔常松ほか 1986〕は、このような特別な埋葬小群が前期末に存在したことを明示している。

また、福岡市金隈146号甕棺墓には小児（5～6歳）の遺体に、春日市伯玄社遺跡85号甕棺墓には小児（10歳前後）の遺体にゴホウラ製の腕輪が副えられていた。ともに、中期前半に属する、弥生時代の墓地遺跡からゴホウラやイモガイ製の腕輪を伴った幼・小児の遺体の発見例はその後も増加しつつある〔木下 1982：416～417〕。ゴホウラやイモガイ製の腕輪は1遺跡からはせいぜい1～3体の成人の着装例が見つかっているにすぎず、きわめて限定された人々にしか着装を許されなかったものである。したがって、これらの人々は、幼児の頃から将来の地位を約束されていた人物である、と考えてよい〔橋口ほか 1973：9〕・〔高倉 1975：24〕。近畿地方では弥生中期の大阪市加美Y1号墳丘墓が、26×15mの墳丘規模をもち、木棺墓23基（成人14体、幼小児9体）に達している〔永島・田中 1985〕。東大阪市瓜生堂遺跡などで知られている他の墳丘墓のばあいには、規模は大きくて15×10m、小さなものでは5×5mほどであるし、被葬者の数も成人は多くても6体でいどであるから、加美遺跡の例がいかに大規模であるかが窺い知れよう。まさに、「近親グループに墳丘上に埋葬されるステイタスの人の数が多かった」のであり、それは「共同体首長層の近親グループの特定墓」であったのであろう〔都出 1985：24〕。

その一方、『魏志倭人伝』は、邪馬台国の女王卑弥呼が男弟によって治国を佐けられ、彼女の没後は、その宗女の台与なる13歳の少女が女王の座についたことを記録している。また、卑弥呼も、倭王に就任した頃は少女であったと推定されている〔山尾 1986：207〕。卑弥呼—台与の宗族は、「鬼道を事とし、能く衆を惑わす」特別な宗教的・政治的能力を代々もっていたわけである。この記事は、縄文時代的な思考と集団組織の原理が、そのままの形ではなかったにせよ、弥生時代の終末においてもなお、脈々と生きつづけていたことを示しているのではあるまいか。

邪馬台国を日本における古代国家の成立過程のどこに位置づけるにせよ、階級支配をすでに実現していることは明らかであるが、その支配機構の中核となっている姉弟の結合は、実は、はるか縄文時代にまでさかのぼって認められる、部族の始祖とのつながりを背景にして、宗教と政治の二つの活動に携わる特別な血統に発していたと思われるのである。

(1988. 10. 30)

謝 辞

本研究を遂行するうえで、資料の実見等に当たってお世話になった方々、種々教示・協力をいただいた方々の芳名を記して謝意にかえたい。

赤澤威・安達厚三・池田次郎・上野和男・江坂輝彌・江原昭善・小野田勝一・片山一道・川合剛・木下実・小泉清隆・佐倉朔・杉山晋作・高橋昌子・多賀谷昭・武井俊哉・田中良之・寺門之隆・土肥直美・永嶋正春・中牧弘允・西本豊弘・濱松美樹・林謙作・山口敏, KANER, Simon, STEWART, Thomas Dale, UBELAKER, Douglas, VORGAS, Enrique Martinez の諸氏。

註

(1) 津雲 K Y 1 号

(図12) については、観察したところでは、上顎中切歯の遠心側が斜めに磨滅しているのは、下顎の全切歯を抜去された結果、下顎を左右に動かして犬歯と咬合させて使用したことによるものであって、研歯と判定することはできない。このような上顎中・側切歯の切縁線がV字形を呈する例は、下顎の全切歯を抜かれた人骨にしばしば認められるところである。

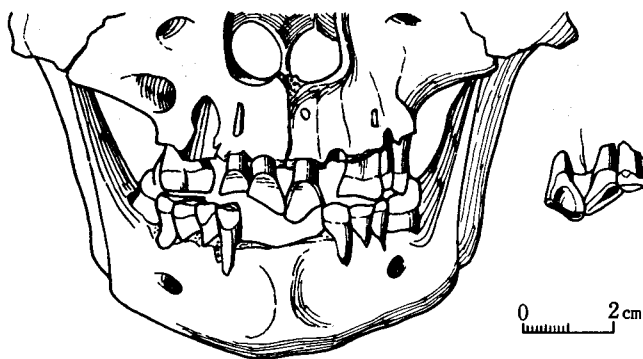


図12 津雲KY1号人骨の上顎切歯の咬耗状態

Fig.12

- (2) 伊川津・吉胡・稲荷山遺跡出土の叉状研歯人骨で肝心の部分が行方不明となっている例がひじょうに多いのは、頭骨からその部分の破片だけが分離され別途保管されたからである。間に戦争や不幸な事件があったにせよ、他の部分はすべて現存していることを想うと、資料の珍しさから私的に保管されていたところに、惜しむべき不幸の原因がある。
- (3) 他に吉胡KY50号人骨が叉状研歯として報告されている[清野・金高 1929: 63~64]・[真岡 1940: 167]。これは壮年の女性で、清野氏らは「第一門歯は前例(KY35号人骨…H)の如く2条の截痕を有す」と記述しているが、真岡氏は上顎左右の中切歯の切縁に2箇所の「切痕」があるけれども、「他の例の如く唇面に縦溝を現わして居ない。即ち切込みが浅い」という。側切歯は左右とも失われている。人の中切歯の切縁に本来存在する切痕の疑いがあるので、本稿では、この標本については、実物を精検する機会を得て、人工とする積極的な証拠が見出せるまでは叉状研歯としては扱わないことにする。抜歯は上顎の左右犬歯と下顎の左右犬歯・中切歯を抜かれた2C2I型である。KY51号老年女性人骨(抜歯2C型)と合葬されていた。京大自然人類学研究室蔵と思われるが、現在行方不明。

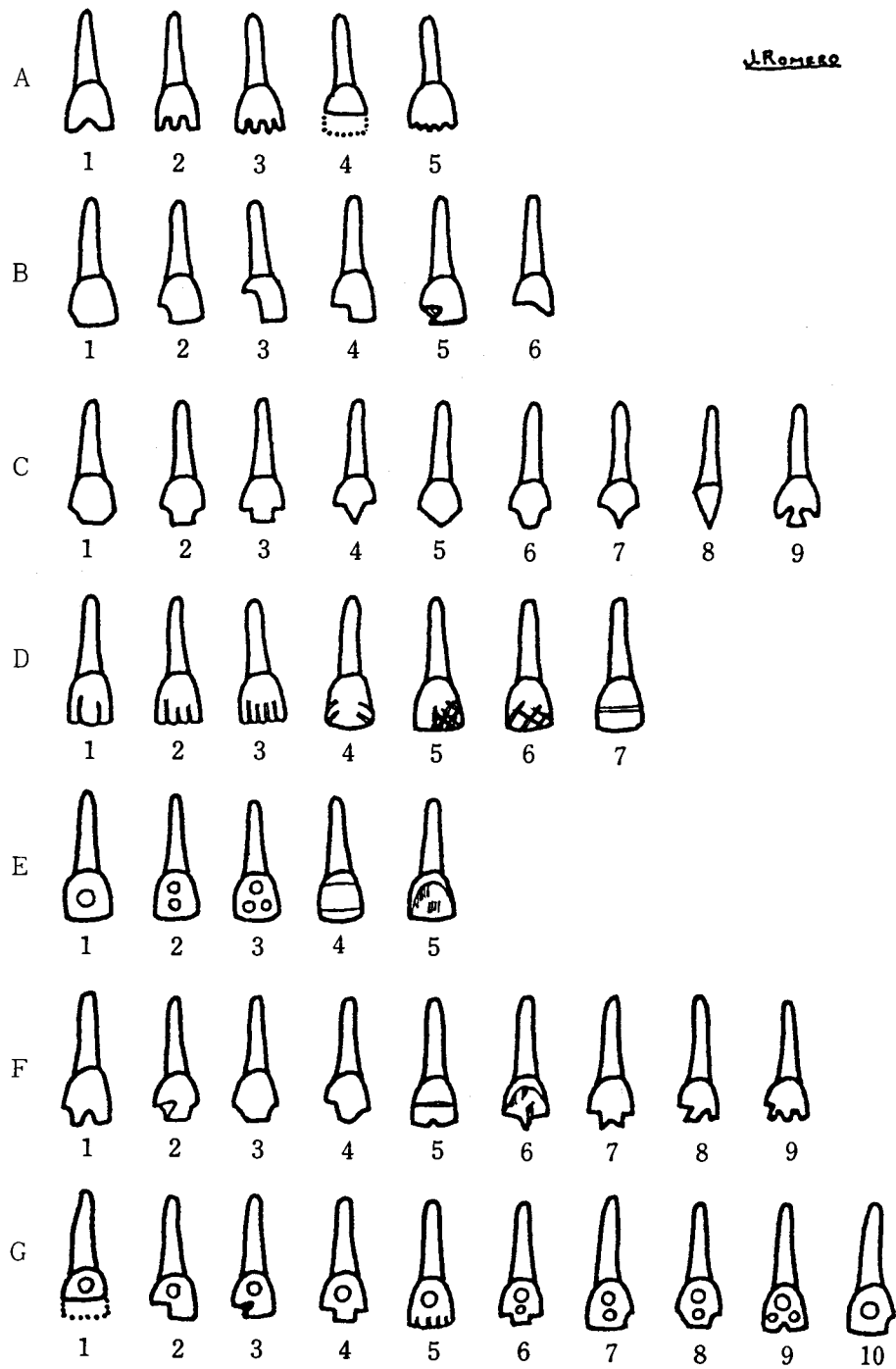


図13 アメリカの先イスパニア時代の歯牙変形 [ROMERO 1958]

Fig.13

叉状研歯

- (4) 鹿児島県南種子町広田遺跡から、弥生時代の叉状研歯とされる例が報告されている。これは集積人骨中に脱落していた上顎右中切歯の切縁に「3個の明らかに人工的な切込みが施してあるが、その切込みは歯冠前面に続かず、叉状というにやや不完全である」という〔永井 1961〕。筆者は、九州大学解剖学第二教室保管の広田遺跡出土の遊離歯すべてに目を通す機会を得たが、該当する歯は見出せなかった。ただし、A区出土の下顎左中切歯で切縁に2箇所の切痕をもつ例に気づいたが、これは自然とみなさざるを得なかった(図14)。

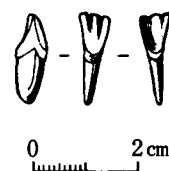


図14 広田遺跡出土の下顎左中切歯の切痕

Fig.14

- (5) 叉状研歯は外国では、中央アメリカ、アフリカ、インドネシアで知られている。特に叉状研歯は中央アメリカで独自に発達しており、メキシコのロメロ ROMERO が大部な論文を著している〔ROMERO 1958〕・〔ROMERO 1970〕。それによると、中米では叉状研歯は先古典期前期(1400~1000 B.C.)から同中期(1000~300 B.C.)にまずメキシコに出現し、同後期(300 B.C.~300 A.D.)から古典期(300~900 A.D.)にミコアカン・ゲレロ・メキシコ・オアカサカ・ヴェラクルツ・ラマファクステカ・グアテマラ・ホンデュラスで盛行期を迎えている。そして、後古典期(900~1520 A.D.)になると再び盛んになる。なお、最近のテオティワカン遺跡の発掘例によると、古典期の神殿に付設された墓地から、歯を変工した遺体が9例まとまって出土したことから、それらの人物は太陽神に奉仕する司祭者たちであると考えられるにいたった。そして、歯の変形に存在する各種の型式差は司祭者の序列によるとのことである。ただし、それらは図13のB4・B5・E1の型式であって、縄文晩期にみるような叉状研歯例は含んでいない(VORGAS, E.M.の教示による)。アフリカについてはリグニッツ LIGNITZ の長篇がある〔LIGNITZ 1919~22〕。それによると、ザンビアのトンガ族、ザイールのポト族、マラウィのマンガジャ族にはしばしば認められるが、モザンビークのヤオ族では時折みかけられるだけである。アフリカでは研歯の理由は、成年式の時に同一部族に属する標識として、おしやれのため、歯を武器として用いるためなどがあげられている。
- (6) 縄文前期に出現した漆工芸のような高度で特殊な技術〔鈴木 1984:102〕も、このような特別な血統の人びとが保持し、彼らを通して代々伝承されてきた可能性もある。ただし、漆についてはかぶれの問題がある。永嶋正春氏によると、かぶれる体質の持主のばあいには漆を扱うのはきわめて困難である、という。もしそうだとすれば、血縁的に始祖にもっとも近いという条件と漆にかぶれないという条件が一致するとはかぎらないから、そのばあいは前者を優先的に考えるべきであることはいうまでもない。
- (7) 叉状研歯は東海西部から近畿地方にかけて分布しているから、この範囲内に居住する人々の共通の始祖と観念しうる人がいたとすれば、両地方にまたがる土器型式圏を形成した縄文後期末の宮滝式土器の時期の人々のなかにいた可能性がつよい。

表3 叉状研歯の計測値

Tab.3

(単位はmm, 一は截痕なしまたは亡失, ×は歯を亡失)

人 骨 名 称		右I ²	右I ¹	左I ¹	左I ²
保美MY3号(♂)	歯 冠 長	×	8.2	8.8	×
	幅	×	8.6	8.3	×
	厚	×	7.0	7.1	×
	截 痕 長	×	3.8, 4.6	4.6, 3.3	×
	幅	×	1.4, 1.6	1.3, 1.2	×

人 骨 名 称		右I ²	右I ¹	左I ¹	左I ²
伊川津KG 9号(♀)	齒 冠 長	×	9.8	×	×
	幅	×	8.6	×	×
	厚	×	6.8	×	×
	截 痕 長	×	4.7, 5.1	×	×
	深	×	0.2, 0.6		×
伊川津KG 21号(♀)	齒 冠 長	×	×	10.4	×
	幅	×	×	7.7	×
	厚	×	×	7.0	×
	截 痕 長	×	×	7.8, 6.4	×
	幅	×	×	2.3, 2.7	×
伊川津KG 22号(♀)	齒 冠 長	×	9.6	9.6	×
	幅	×	7.7	7.9	×
	厚	×	6.6	6.7	×
	截 痕 長	×	5.0, 5.1	5.0, 5.5	×
伊川津S Z44号(♂)	齒 冠 長	8.4	9.6	9.6	9.2
	幅	7.2	8.3	8.0	7.2
	厚	6.1	6.6	6.6	6.1
	截 痕 長	6.0	8.0, 6.9	8.4, 7.9	7.6
	幅	2.7	2.0, 2.1	1.9, 2.0	3.3
	深	1.5	2.6, 2.3	2.3, 2.3	2.2
伊川津S Z45号(♂)	齒 冠 長	7.5	10.7	10.5	7.2
	幅		8.1	8.3	
	截 痕 長	—	4.5, 9.0	4.5, 5.5	—
伊川津I K19号(♂)	齒 冠 長	×	×	11.7	8.8
	幅	×	×	8.4	6.3
	厚	×	×	7.3	6.0
	截 痕 長	×	×	7.7, 8.2, 5.7	3.7
	幅	×	×	1.0, 1.3, 0.9	1.2
	深	×	×	0.8, 0.8, 0.8	0.4
吉胡KY 280号(♂)	齒 冠 長	×	9.7	9.3	
	幅	×	8.6	9.5	
	截 痕 長	×	3.6, 4.4	3.5, 2.9	—
	幅	×	0.5, 1.0	0.5, 0.5	—
吉胡BN 13号(♀)	齒 冠 長	×	約 7.8	×	5.8
	幅	×	約 8.0	×	7.2
	厚	×		×	5.7
	截 痕 長	×		×	2.4
	幅	×		×	0.7
	深	×		×	0.4
吉胡BN 17号(♀)	齒 冠 長	×	9.6	10.2	×
	幅	×	9.3	9.5	×
	厚	×		8.2	×

叉状研齒

人 骨 名 称		右I ²	右I ¹	左I ¹	左I ²		
	截 痕 長 幅 深	×	3.0, 4.1 1.4, 1.5	6.6, 5.8 1.6, 1.5 1.0	×	×	×
稲荷山KY35号(♂)	齒 冠 長	×	11.2	11.0	10.2		
	幅	×	8.6	8.6	7.3		
	厚	×	6.6				
	截 痕 長 幅	×	7.0, 6.4 2.5, 2.0	4.8, 4.6 1.5, 2.0	4.9 1.8		
枯木宮OG5号(♀)	齒 冠 長	4.4	8.8	8.0	4.7		
	幅	6.1	8.4	7.5	6.6		
	截 痕 長	1.0	1.0, 2.0	1.0, 1.0	—		
	深	—	0.2, 0.5	0.1, 0.1	—		
枯木宮NS9号(♀)	齒 冠 長	×	11.6	11.1	—		
	幅	×	9.1	9.0	—		
	截 痕 長	×	5.7, 5.5	6.5, 5.5	—		
	幅	×	0.8		—		
本刈谷EH1号(♂)	齒 冠 長	8.4	9.0	9.3	7.7		
	幅	7.8	8.5	8.6	7.5		
	截 痕 長	2.0	2.0, 2.0, 3.0	1.0, 1.0	1.0		
雷NM2号	齒 冠 長	×	×	9.8	×		
	幅	×	×	8.6	×		
	厚	×	×	7.4	×		
	截 痕 長	×	×	7.0, 5.0	×		
	幅	×	×	2.0, 1.9	×		
国府KG9号(♀)	齒 冠 長	9.2	10.8	10.6	9.4		
	幅	5.5	8.5	8.3	5.9		
	厚	5.6	7.5	7.6	6.8		
	截 痕 長	5.8	6.2, 6.5	6.5, 7.4	4.8		
	幅	2.8	2.0, 2.0	2.5, 2.0	2.0		
	切り込み深	0.7	2.8, 2.7	2.4, 2.0	0.4		
国府SM3号(♂)	齒 冠 長	10.7	11.2	×	×		
	幅	8.1	8.4	×	×		
	厚	7.4	8.3	×	×		
	截 痕 長	5.6	7.1, 7.4	×	×		
	幅	3.0	1.5, 1.5	×	×		
	深	2.2	0.6, 0.8	×	×		
	切 縁 幅	2.0	2.5	×	×		
国府OS1号(♀)	齒 冠 長	8.1	9.9	11.5	×		
	幅	7.0	7.4以上	9.3	×		
	厚			7.5	×		
	截 痕 長	5.6	×	6.6, 7.5	×		
	幅	3.2	×	2.8, 3.2	×		
	切り込み深	3.3	×	3.5, 4.6	×		

文 献

- 池田次郎 1986『大阪府国府遺跡出土人骨の研究』昭和60年度科学研究補助金（一般研究C）研究成果報告書。
- 1988「河内・国府遺跡の人骨」（橿原考古学研究所編）『橿原考古学研究所論集』10, 425～449, 吉川弘文館。
- 江原昭善・渡辺 毅 1972「人骨」（加藤岩蔵・斎藤嘉彦編）『本刈谷貝塚』95～103, 刈谷市教育委員会。
- ・松本 真・木下 実 1988「出土人骨の形質」（小野田勝一・春成 秀爾・西本 豊弘編）『伊川津遺跡』渥美町埋蔵文化財調査報告書, 4, 343～394。
- 大倉辰雄 1939「三河国稻荷山貝塚人ノ抜歯及ビ歯牙変形ノ風習ニ就テ」『京都医学雑誌』36—8, 106～114。
- 大阪府教育委員会 1971『国府遺跡発掘調査概要』大阪府文化財調査概要, 1971—7。
- 大林太良 1971「縄文時代の社会組織」『季刊人類学』, 2—2, 3～81。
- 1977『邪馬台国』中公新書, 466, 中央公論社。
- 大和久震平 1966『柏子所貝塚—第2次・第3次発掘調査報告書—』秋田県文化財調査報告書, 8。
- 小片 保・森本岩太郎・小片丘彦・森沢佐哉・行形 勝・服部又彦 1981「人骨」（住吉政治・斎藤嘉彦編）『枯木宮貝塚Ⅰ』50～78, 西尾市教育委員会。
- 小栗鉄次郎 1933「鳴海町雷貝塚」『愛知県史蹟名勝天然紀念物調査報告』11, 14～22。
- 上條雍彦 1962『日本人永久歯解剖学』アナトーム社。
- 木下尚子 1982「弥生時代における南海産貝製腕輪の生成と展開」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』上, 413～443。
- 清野謙次 1920「備中国浅口郡大島村津雲貝塚人骨報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』5, 29～63。
- 1923「考古漫録」(61, 門歯に加工した石器時代人骨)『社会史研究』10—1, 41～45。
- 1928『日本石器時代人研究』岡書院。
- ・金高勘次 1929「三河国古胡貝塚人の抜歯及び歯牙変形の風習に就て」『史前学雑誌』1—3, 43～68。
- 1949『古代人骨の研究に基づく日本人種論』本文・図譜, 岩波書店。
- 1969『日本貝塚の研究』岩波書店。
- 小金井良精 1919「日本石器時代人の歯牙を變形する風習に就て」『人類学雑誌』34—11・12, 349～368, 付図。
- 1923「日本石器時代人の歯牙を變形する風習に就ての追加」『人類学雑誌』38—6, 229～238。
- 小林行雄 1951『日本考古学概説』創元社。
- 1967a「原始のこころと造型」（小林行雄ほか編）『日本文学の歴史』1, 42～65, 角川書店。
- 1967b『女王国の出現』国民の歴史, 1, 文英堂。
- サーヴィス, エルマン・R(蒲生正男訳) 1972『狩猟民』現代文化人類学, 2, 鹿島出版会。
- 島 五郎 1963「大阪府国府遺跡出土の抜歯を伴う叉状研歯人骨追加資料」(橿原考古学研究所編)『近畿古文化論攷』33～38, 吉川弘文館。
- 鈴木公雄 1984「日本の新石器時代」(原秀三郎ほか編)『講座日本歴史』1, 原始・古代1, 75～116, 東京大学出版会。
- 鈴木 尚 1939「人工的歯牙の變形」『人類学・先史学講座』12, 1～51, 雄山閣。
- 1940「叉状研歯の新資料とその埋葬状態について」『人類学雑誌』55—11, 11～16。
- 1946「叉状研歯について」『あんとろぼす』1, 30。
- 1975「斗争により損傷された3個の古人骨」『人類学雑誌』83—3, 269～277。
- 住谷一彦・クライナー, ヨーゼフ 1977『南西諸島の神觀念』未来社。

- 高倉洋彰 1975「右手の不使用—南海産貝製腕輪着装の意義」『九州歴史資料館研究論集』1, 1～32.
- 都出比呂志 1985「加美墓と楯築墓」『日本考古学協会昭和60年度大会研究発表要旨』24.
- 常松幹雄・下村 智・横山邦継 1986『古武高木』福岡市埋蔵文化財調査報告書, 143.
- 永井昌文 1961「広田弥生式時代人の歯牙変形例」『解剖学雑誌』36—1, 1—1.
- 永島暉臣・田中清美 1985「大阪府加美遺跡の弥生時代中期墳丘墓」『月刊文化財』266, 19～26.
- 中山英司 1952「人骨」(斎藤 忠編)『吉胡貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告, 1, 125～144, 吉川弘文館.
- 西口陽一 1983「耳飾からみた性別」『季刊考古学』5, 52～56.
- 橋口達也・折尾 学 1973「小児骨に伴ったゴホウラ製貝輪」『九州考古学』47, 1～10.
- 林 謙作 1977「縄文期の葬制—第Ⅱ部・遺体の配列, とくに頭位方向—」『考古学雑誌』63—3, 1～36.
- 1980「東日本縄文期墓制の変遷(予察)」『人類学雑誌』88—3, 269～284.
- 春成秀爾 1973「抜歯の意義」『考古学研究』20—2, 25～48.
- 1979「縄文晩期の婚後居住規定」『岡山大学法文学部学術紀要』40(史学篇), 25～63.
- 1980 a 「縄文晩期の装身原理」『小田原考古学研究会会報』9, 44～60.
- 1980 b 「縄文合葬論」『信濃』32—4, 1～35.
- 1981「縄文時代の複婚制について」『考古学雑誌』67—2, 1～40.
- 1982「縄文社会論」(加藤晋平ほか編)『縄文文化の研究』8, 社会・文化, 223～252, 雄山閣.
- 1984 a 「叉状研歯の継承」『歴博』6, 12～13.
- 1984 b 「弥生時代九州の居住規定」『国立歴史民俗博物館研究報告』3, 1～40.
- 1985 a 「弥生時代畿内の親族構成」『国立歴史民俗博物館研究報告』5, 1～47.
- 1985 b 「鉤と霊—有鉤短剣の研究—」『国立歴史民俗博物館研究報告』7, 1～62.
- 1988「墓は語る—弥生墓地にみる親族組織—」(白石太一郎編)『考古学への招待』週刊朝日百科, 日本の歴史別冊, 歴史の読み方, 3, 15～21.
- 藤田恒太郎・桐野忠大 1976『歯の解剖学』第21版, 金原出版.
- 眞岡亀四郎 1940「日本石器時代人ノ人為的歯牙変形ニ就テ」『京都医学雑誌』37—3, 166～168, 附図1～3.
- 宮坂光次 1925「三河国保美貝塚に於ける人骨埋葬の状態」『人類学雑誌』40—10, 364～372.
- 山尾幸久 1986『新版・魏志倭人伝』講談社現代新書, 835.
- 山内清男 1952「第二トレンチ」(斎藤 忠編)『吉胡貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告, 1, 93～124, 吉川弘文館.
- 吉田富夫・増子康真 1966『鳴海のあけぼの』文化財叢書, 42, 名古屋市教育委員会.
- KOGANEI, Yoshikiyo 1922 Über die künstliche Deformation des Gebisses bei den Steinzeitmenschen Japans. Mit. mediz. Fak. Kaiserl. Univ. Tokyo, XXVIII, S. 429～485. Taf. XIX～XXV, Tokyo.
- LIGNITZ, Hans 1919～1924 Die Künstlichen Zahnverstümmelungen in Afrika im Lichte der Kulturkreisforschung. ANTHROPOS, XIV—XV, S. 891～943, XVI—XVII, S. 247～264, XVIII—XIX, S. 866～889, Wien.
- ROMERO, Javier 1958 Mutilaciones Dentarias, Prehispanicas de Mexico y America en General. Serie Investigaciones, 3, Instituto Nacional de Antropologia e Historia, Mexico.
- 1970 Dental Mutilation, Trephination, and Cranial Deformation. (ed. STEWART, T. Dale) Physical Anthropology. Handbook of Middle American Indians, 9, pp. 50～67, Univ. Texas Press, Austin.
- SCHRÖDER, Hermann 1906 Die künstliche Deformation des Gebisses. Verlag von Julius Abel, Greifswald.

(本館 考古研究部)

Teeth Filing in Ancient Japan

HARUNARI Hideji

The custom of teeth filing consists in engraving two or three lines of grooves in human upper median incisors and one line of groove in the upper lateral incisor to work the teeth into forked form. This custom existed in Africa in 19th century, in the Central America from early Preclassic period (1400 B. C.) to Postclassic period (1500 A. D.) and in Japan in the latest Jomon period (1000-200 B. C.).

Specimens of teeth filing in Jomon period have been unearthed from 8 sites in Aichi Prefecture and Osaka Prefecture, both in Central Japan (28 samples in all). These 28 samples are divided into 13 males, 14 females and 1 unknown. The number of unearthed specimens is the highest in Ikawazu site (9 samples) and Yoshigo site (8 samples).

The teeth filing has been executed on about 20% of human adult bones unearthed at one site. Since the teeth filing is recognized also on the teeth of humans dead at their 15 to 16 and 19 to 20 years of age, it may assumed that almost all the filings were performed in their teens. Though some teeth filing remains inachieved on the teeth of humans at their 20s and 30s, we may presume that the filing was carried out in their teens too.

In this region, there unearthed two types of specimens of teeth extraction: type 4I where two upper canines and four lower incisors have been extracted and type 2C where two upper canines and two lower canine teeth have been extracted. It is assumed that any adult belonged to either of these two. Examples of teeth filing are found 25 cases in type 4I, 2 cases in type 2C and only 1 case where any lower tooth except two upper canines has not been extracted (type 0). The teeth filing is onesidedly numerous in the type 4I. Further let us note that the human bones with waist ornaments belong, for the most part, to the 4I type. The author assumes that the humans belonging to the type 4I were those people who were from the region and lived in the settlement in that region even after their marriage and the type 2C, those

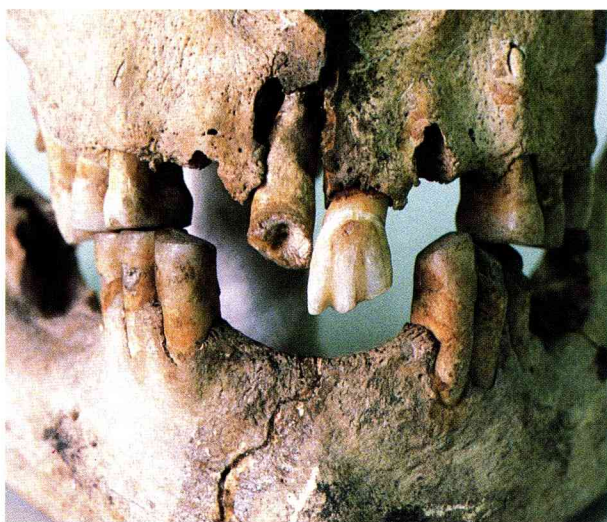
who came from other settlements after their marriage.

It is supposed that the males and females with their teeth filed were basically from the region and considered as the closest blood relatives to the ancestors of the tribe in that region. They were of special lineage and their blood kinship might have been: mother-son, father-daughter, elder sister and younger brother, elder brother and younger sister, for example. With the relationship to their ancestors as their backbone of authority, they should have displayed to the full their power as political leaders and at the same time operated some tribal system together with the teeth-filed people belonging to other settlements.

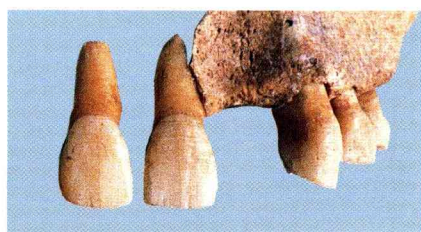
List of figures, tables and plates

- Fig. 1-4 Skeletal Materials with Teeth Filing from the Hobi Site (1, 2), the Ikawazu Site (3-11), the Yoshigo Site (12-19), the Inariyama Site (20, 21), the Karekinomiya Site (22, 23), the Motokariya Site (24), the Ikazuchi Site (25), and the Koh Site (26-28).
- Fig. 5 Distribution Map of the Sites excavating the Skeletal Materials with Teeth Filing.
- Fig. 6 Upper Incisors with the Permanent Teeth perfectly appearing and the Filed Incisors.
- Fig. 7 Teeth Filing from the Tzintzuntzan Site, Mexico.
- Fig. 8 Teeth Filing in Africa (after FÜLLEBORN, 1901).
- Fig. 9 Very Points excavating the Skeletal Materials with Teeth Filing, in the Cemetery of the Yoshigo Site, Aichi Prefecture (large triangles and circles).
- Fig. 10 Ditto, in the Cemetery of the Inariyama Site, Aichi Prefecture (large triangles).
- Fig. 11 Models of the Inheritance of Men and Women practicing Teeth Filing.
- Fig. 12 Wear of Upper Incisors at the Skeletal Material of the Tsukumo KY-1.
- Fig. 13 Types of Pre-Hispanic Dental Mutilation in the America (after ROMERO, 1970).

- Fig. 14 Lower Left Median Incisor not Filed from the Hirota Site, Kagoshima Prefecture, Yayoi Period.
- Tab. 1 List of Human Skeletal Materials with Teeth Filing in Japan (MΛ: filed teeth, I, C and P: extracted teeth).
- Tab. 2 Types of Teeth Extraction of Man with Teeth Filing.
- Tab. 3 Measurements of Filed Teeth from Japan.
- Pl. 1 4: Ikawazu KG21 ♀, 5: Ikawazu KG22 ♀, 7: Ikawazu SZ44 ♂, 8: Ikawazu SZ45 ♂, 11: Ikawazu IK19 ♂, 16: Yoshigo KY280 ♂, 18: Yoshigo BN17 ♀, 20: Inariyama KY35 ♂.
- Pl. 2 23: Karekinomiya NS9 ♀, 24: Motokariya EH1 ♂, 26: Kō KG9 ♀, 27: Kō SM3 ♂, 28: Kō OS1 ♀.



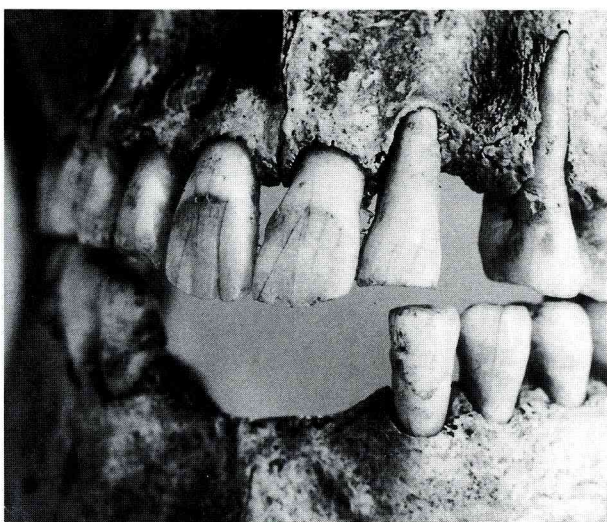
4 伊川津KG21号人骨 ♀



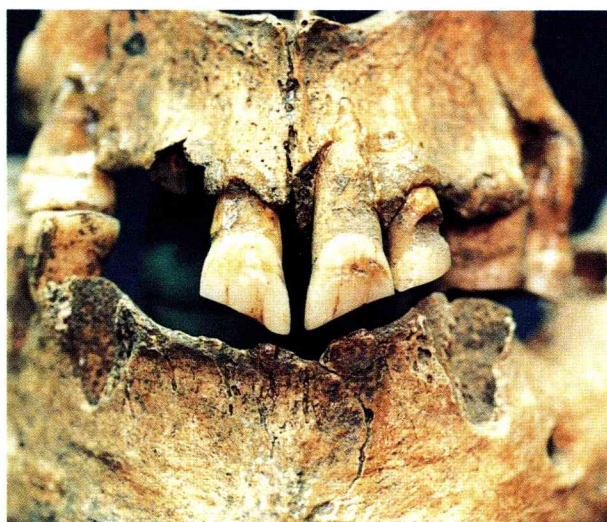
5 伊川津KG22号人骨 ♀



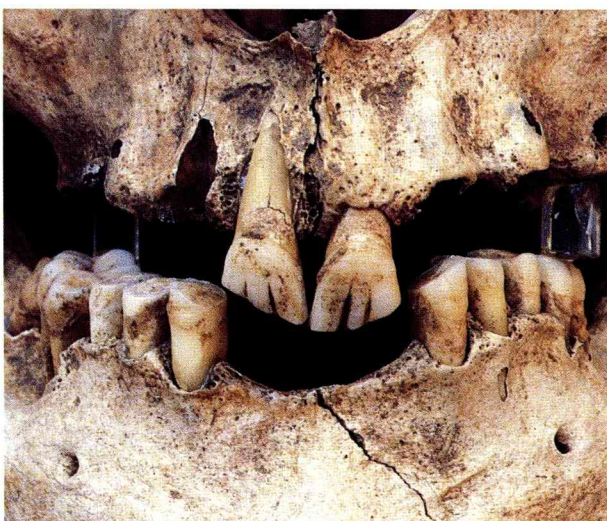
7 伊川津SZ44号人骨 ♂



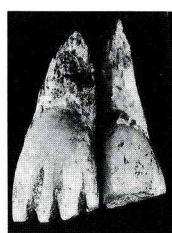
8 伊川津SZ45号人骨 ♂



16 吉胡KY280号人骨 ♂



18 吉胡BN17号人骨 ♀



11 伊川津IK
19号人骨 ♂



20 稲荷山KY35号人骨 ♂

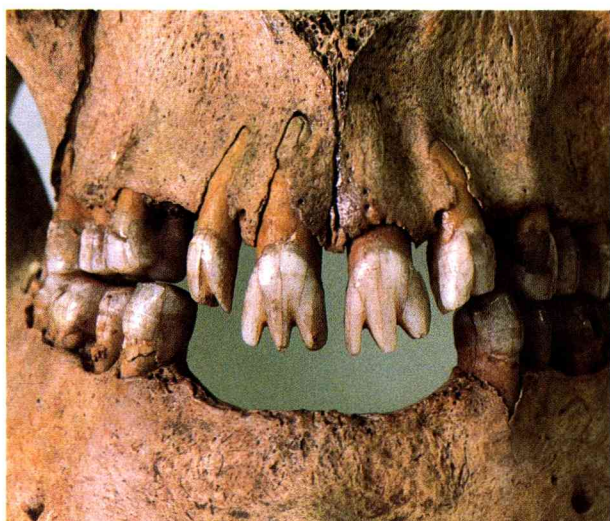




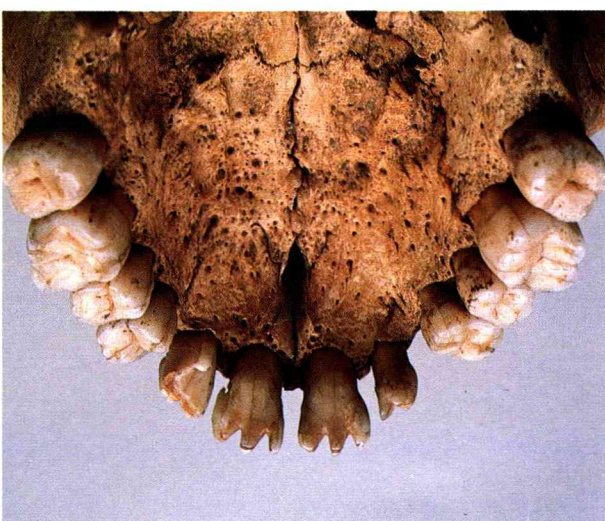
23 枯木宮NS 9号人骨 ♀



24 本刈谷EH 1号人骨 ♂



26 国府KG9号人骨 ♀



27 国府SM3号人骨 ♂



28 国府OS1号人骨 ♀